

# ヒマラヤ

No. 128

●特集 クン=H A J 登山学校



**1982 JUL.**

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

# 1983年ヒマラヤ登山学校隊員募集

ヌン (7,135m)

1983年度ヒマラヤ登山学校は、カシミールの盟主ヌン峰で実施することに決定しました。これは単なるバック登山とはまったく異なり、自ら遠征を行なえる人材を育成することを主眼としており、経験豊富なインストラクターのもとに、正しいセオリーにのっとった確実な登山を指導しています。隊員はすべて、装備・食糧・輸送・梱包・渉外等の具体的実務に参画していただき、また国内山岳での強化合宿も行なうなど、ヒマラヤ遠征全般を体得できるように組まれております。

過去の卒業生は、現在ヒマラヤで幅広い活動を行っており、登山学校の経験を基にしてさらに遠征を実施している人は9名に達し、その中には8,000m峰登頂者4名も含まれています。

登山学校隊の実績は下記のとおりです。

- ・ 1977年 タルコット (6,099m)  
(JACに協賛して行なった)
- ・ 1978年 ヌン (7,135m) 4名登頂  
トリスルI峰 (7,120m) 6名登頂  
II峰 (6,690m) 7名登頂
- ・ 1979年 キャシードラル (6,400m) 6,000mまで

- ・ 1980年 ケダルナート・ドーム (6,831m)  
19名登頂
- ・ 1981年 ナンダ・カート (6,611m) 事故のため断念
- ・ 1982年 クン (7,077m) 現在準備活動中

## 実施要項

- 目的** ①ヌン (7,135m) 登頂  
②高所登山の基礎修得
- 時期** 1983年7月末～8月末 (35日間)
- 負担金** 71万円 (航空運賃の変動等により変わることもあります)
- 定員** 20名  
インストラクター4名 (医師含む)
- 申込み** 1982年6月末までに下記宛に申込みこと (資料を送ります)
- 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1  
淀橋食糧ビル506号 日本ヒマラヤ協会

★今年度より準備活動、強化合宿等をより万全に行なうため、締切りを早くします。希望者は早急にお申込み下さい。

この登山隊の旅行手続は、(株)西遊旅行が担当します。一般旅行業607号

## 表紙写真

カラコルムはバツラ山群のカランバール氷河左岸上の6,258峰。内田 勲

# ヒマラヤ No.128

1. **ヒマラヤ放談** \_\_\_\_\_ ロク・ダルシャン
4. **ヒマラヤニュース** <地域ニュース・トピックス・インフォメーション>
8. 昭和57年度日本ヒマラヤ協会通常総会報告
20. **特集** **クン** 1982年HAJ登山学校
25. **連載** 未踏への誘い(7) \_\_\_\_\_ 内田 勲  
ヒマラヤ閑話<sup>53</sup> \_\_\_\_\_ 水野 勉
30. 事務局日誌・寸感

# ヒマラヤ放談

—ルンビニー— それは世界中の仏教徒にとって神聖な行脚の地である。喬ゴウ峇タ摩マ悉シツ達タル多タ、即ち仏陀が紀元前 623年に生まれたのはこの地である。

ネパールのインドとの国境に近いバイラワから西へ20kmの所にあるルンビニーは、昔は沙羅双樹の樹が生茂った緑いっぱいの美しい園であったと云う。

現在、この仏陀生誕の地はルンビニー開発プロジェクトの元に大きく変わろうとしている。

今回は来日中のロク・ダルシャン氏にこのプロジェクトについてお話を伺った。氏はルンビニー開発委員会の委員長であり、故マヘンドラ国王の秘書長官でもあった方である。

## 日本通のお役人

——— お忙しいところ恐縮です。日本を出発されるのは何日ですか。

ダルシャン 明後日に香港に向かいます。

——— それでは早速伺いたいと思います。ダルシャンさんは、かなりの日本通であるとお聞きしておりますが、日本へはもう何回目ですか。

ダルシャン 日本へはもう何度も何度も来ております。一番最初に訪日したのは1956年でした。あの頃は、故マヘンドラ国王の秘書長官をやっておりましたので自分のいろいろな仕事に関する勉強をしていきました。

また、あの時は皇居で天皇陛下の儀式に参列する栄誉を賜り、思い出深い印象として残っております。

——— その時は、日本にどのくらい滞在されたのですか。

ダルシャン 40日間おりました。自分の仕事に関する各分野の多くの専門家の人達に会っていろいろと勉強をしていきました。

——— 今回、訪日された目的は何んでしょうか。

ダルシャン 今回はオフィシャルなものとプライベートなものとの2つの目的があって来日しました。



## ロク・ダルシャン

オフィシャルな方は、日本の仏教団体とルンビニー・プロジェクトについて打ち合わせをするためです。

もう1つのプライベートな方は、私の心臓を診て貰うためです。心臓の検査については東京医科大学の早田教授が全てアレンジしてくれ、心臓科医のササキバラ先生らに診て貰いました。

早田教授は大変素晴らしい私の友人です。彼はネパールの人々のために多くの医療奉仕をしてきています。クーンブ地方には2つの病院を建てて高山病にかかった人々を助けてきています。

——— 早田先生は、先頃「早田基金」を設立してより強力なネパールの医療活動に乗り出すことになりましたね。

ダルシャン はい。私も「早田基金」のネパール支部の関係者です。「早田基金」は、我が国の総理大臣 Mr. S. タバが後援会長で外務大臣が理事長となり、その他多くのお医者さん達によって構成されております。(編者註：早田基金については、ヒマラヤ127号のトピックス欄をご覧ください。)

## ルンビニー開発プロジェクト

——— ダルシャンさんは、以前は故マヘンドラ

国王の秘書長官をお務めだったそうですが、現在  
はどのような役職につかれておるのでしょうか。  
ダルシャン 私は今、政府のルンビニ開発委員会  
の委員長をやっております。

——カトマンズあたりでもこの「ルンビニ・  
プロジェクト」と言う言葉を良く耳にしますが、  
このルンビニ開発プロジェクトとはどんなものか  
お聞かせ下さい。

ダルシャン ご存知のようにルンビニは仏陀の生  
誕の地です。1956年に第4回世界仏教徒会議の際、  
故マヘンドラ国王はルンビニの開発のために数10  
万ルピーを寄付しました。この地域の開発はその  
時から始ったと云えます。

1956年2月に故マヘンドラ国王は個人的にルン  
ビニを訪問して、政府が仏陀の聖なる地の名前と  
理想を保つためにあらゆる努力を尽すことを明ら  
かにしました。

其の後、1967年に当時の国連事務総長のウ・タ  
ント氏が、ネパール訪問の際にこのルンビニ開発  
プロジェクトを国際的な計画とすることを申し出  
ました。これによってルンビニ開発プロジェクト  
は、国連それにインド、タイ2つの国の後援と日  
本を含めた20の支援国の協力を得ました。

このルンビニ開発プロジェクトのスピーディな  
実現のためには現ビレンドラ国王も熱烈かつ不断  
の関心を示されており、1975年のラストリア・パ  
ンチェットの第26回会議にあてたメッセージの中  
でビレンドラ国王は、「基本計画に従って国際的に  
有名なルンビニの開発を行う」ことを明らかにし  
ました。

これによって政府は、この開発プロジェクトを  
達成・促進する新しい職掌団体としてルンビニ開  
発委員会を組織したわけです。

——ダルシャンさんは当初から今のポストに  
関わられていたのですか。

ダルシャン 私は、1976年の12月に政府からルン  
ビニ開発委員会の委員長に任命されました。

## 聖なる園

——ルンビニ開発プロジェクトの具体的な計  
画についてお聞かせ下さい。

ダルシャン ルンビニ開発プロジェクトは、3段

階に分かれています。

第1段階は、基本計画のデザインとして、我々  
委員会はそのデザインを世界的に有名な建築家で  
日本の丹下教授に許可しました。そしてこれらは、  
国連、ネパール政府、それに日本からのExpo'70  
記念基金からの資金援助で完成しています。

第2段階は、フラストラクト・ワークと呼ばれ、  
いろいろな基礎的な最初の仕事としてパイラワか  
らルンビニへの約22kmの道路や水道、それに植  
林などが行われました。植林の方は、599,000本  
ものさまざま果物、装飾用の樹木などが植えられ  
ました。それから巡礼者のための宿泊施設として  
宿坊付きホテルも建設され、この第2段階の仕事  
もすでに終了しています。

第3段階は、プロジェクトの詳細な建設として  
1985年以降の残りの作業であります。

——その基本計画のデザインと云うのは、ど  
のようなものなんですか。

ダルシャン 基本計画は、全地域を緑地で囲んだ  
それぞれ1平方マイル（編者註：783,443坪）の  
3つの主要部分、即ちルンビニ村、修道区、聖な  
る園から構成されてます。

ルンビニ村は、1つには巡礼者や観光客を、も  
う1つには地方のサービスをする人を収容する施  
設を提供する所です。

修道区の区域には発掘中に見つかった遺物と、  
仏陀の生涯を物語るいろんな資料を収める現地の  
博物館が含まれる計画です。また、ここには規模  
の小さな図書館や情報センター、それにいろいろ  
な国や宗教団体によって一連の寺院、修道院、礼  
拝所も作られることになっています。

聖なる園、昔のルンビニは、緑がいっぱいで樹  
陰の多い豊かな沙羅双樹の茂った美しい園であ  
ったと云われてます。

このデザインの本質としても、仏陀の誕生の感  
じに合った雰囲気のものでなければならないと云  
うことから植樹や眺望はこの目的を反映したもの  
となり、すべての構造物は最高のデザイン水準で  
建築されなければならないなどです。

——このルンビニ開発プロジェクトは、何年  
頃迄に終了するのでしょうか。

ダルシャン これから7年後の'88～'89年に終了



## 地域ニュース

### 〔インド〕

#### インドで異常冷夏

インドの穀倉地帯ガンジス川上流域一帯が、過去100年間で最大の記録的な「雨と冷夏」に見舞われている。農村部では収穫、乾燥期の小麦を雨にたたかれ、大幅な減収は確実とみられている。政府はすでに被害農家の救済を開始、政府買い付けの確保に懸命だが見通しは暗い。世界人口の6分の1をかかえる“人口大国”だけに、被害が拡大すれば世界的な穀物市況にも影響すると懸念されている。

インドの4、5月といえば例年なら最高気温は40度にも上がり、人も動物もグッタリと活動停止に陥るほどの酷暑期。空気が乾ききり、暑さとホコリっぽい大気が耐え難い季節だ。

ところが今年は、3月下旬以来、強い風を伴う「雨あらし」が間欠的に北西部一帯を襲っており、ニューデリーでみると、5月前半で過去100年間で最高の60ミリもの雨量を記録した。この雨の影響で気温も上がらず、去る5月12日の最高気温は平年を15度も下回る24.8度と、これまた5月としては過去100年間の最低を記録。ヒマラヤ山麓の避暑地では連日、季節外れの雪が降っている。

(5月17日 朝日新聞)

#### ヒマラヤ8000キロを

##### 徒歩横断

インド陸軍の4人のパーティーがこのほど、ヒマラヤ山脈の東端から西端まで全長約8,000キロの徒歩横断に成功した。

計画責任者が明らかにしたところによると、4人は昨年1月、中国、ビルマとの国境のアルナチャルプラデン地区を出発。475日後の5月5日、K<sub>2</sub>の東側のカラコルム峠に到着したという。

昨年のニュージーランド隊に次ぎ史上2番目だが、インド隊は別コースをとり、3,000キロ長かった。

(5月12日 朝日新聞)

#### ホテル・タックス廃止

昨年2月1日から実施されていたホテル・タックス制度（外貨で支払う場合10%）が、今年2月28日付で、全面的に廃止されました。

旅行者にとっては、費用が1割安くなる訳でグット・ニュースと云えましょう。

#### インド国鉄料金値上げ

インフレにより4月1日からインド国鉄の全てのクラスの料金が値上りしました。

一例を挙げますと

エアコン付ファーストクラス	20ルピー→25ルピー
“ 寝台	10ルピー→12ルピー
冷房車（普通車輻）	6ルピー→12ルピー

となります。インフレと云っても、インドの国鉄は日本の国鉄とは違い、値上り料金もそれほどではないようです。

### 〔ネパール〕

#### プレ・モンスーン期、 日本隊の結果出揃う！

プレ・モンスーンのネパール・ヒマラヤには、13ヶ国から35隊の入山があり そのうち日本隊は12隊が入山した。以下は日本隊の結果である。

・ピックホワイトピーク（7,083 m） 東海大山岳会・ネパール合同隊、加藤弘司隊長他8名、5月3日と7日の2度にわたって日本人隊員5名とシェルパ1名が登頂に成功。

・アンナプルナⅢ峰（7,555 m） 愛知三河合同隊、中瀬司隊長他10名、4月24日にC・4（6,350 m）からC・5（6,900 m）への荷上げ途中で雪崩にあい隊員1名が行方不明となり断念。

・オンミ・カンリ（7,028 m） 東京都庁山岳部・ネパール合同隊、金子利三隊長他13名、4月29日と5月1日の2度にわたって登頂に成功。登頂者は日本人隊員6名。

・ドルジェ・ラクバ（6,989 m） 豊田山岳会・ネパール合同隊、田中一典隊長他11名、4月26日と29日の2度にわたって登頂に成功。登頂者は日本人隊員全員とネパール人1名。

・カングルー（7,010 m） 群馬県富岡労山隊、神戸治男隊長他6名、5月2日と3日の2度にわたって登頂に成功。登頂者は日本人隊員2名とシェルパ3名。

・ニルギリ北峰（7,061 m） 石川県労山隊、杉下健治隊長他7名、5月4日に登頂に成功。登頂者は日本人隊員3名とシェルパ2名。

・プルビ・チャチュ（6,658 m） 大阪府労山隊・ネパール警察登山探検財団合同隊、安田一郎隊長他19名、5月1日と3日の両日にわたって初登頂に成功。登頂者は日本人隊員14名とネパール人2名。

・ラムジュン・ヒマール（6,983 m） 福岡労山隊、吉野和記隊長他3名、5月6日、吉野隊長と女性隊員2名が登頂。

・ランシサ・リ（6,300 m） 名古屋大学隊、井上公隊長他5名、4月23日、24日の両日に井上隊長と隊員3名それにシェルパ2名が初登頂に成功。

・ヒムルン・ヒマール（7,126 m） 弘前大・ネパール合同隊、明石誠隊長他12名、6,800 mに到着後、5月18日断念。

・ブリクティ（6,720 m） ネパール・HAJ合同隊、菊地薫隊長他14名、初登頂に成功(速報参照)。

・チャンラ（6,715 m） ネパール・同人ユングフラウ合同隊、今季は偵察活動のみに終る。

## 〔中国〕

### ナムチャ・バルワ解禁か！

中国科学院は今年、中国領内のヒマラヤ山脈末端に聳える未踏峰ナムチャ・バルワ（7,756 m）の調査を行うことになり、すでに、同峰への登山ルート調査に赴いた中国国家体育運動委員会調査隊が、ルート調査を終え、北京に戻ったと伝えられている。（5月21日 朝日新聞）

### チベットにリチウムの宝庫

中国地質鉱産省の言明として伝えると、チベットで基礎的調査の結果明らかにされたリチウムの埋蔵量は、世界の総埋蔵量の半分近くを占めているとのことである。

中国は50年代の中ごろ、チベットの多くの塩湖の沈積物中にあるリチウムを発見していたが、80年からチベット北部地区の塩湖で600余のサンプルを採取し、これらの塩湖に、豊富な工業価値を持つリチウム鉱が含まれ、工業化が比較的容易であることが裏付けられた。

（註）リチウムは21世紀のエネルギーとして期待されている核融合の燃料・三重水素の原料となることから資源として注目されている。身近なところでは、リチウム電池として電卓、時計、カメラなどに使われている。（5月19日 朝日新聞）

## インフォメーション

### 「写真集・世界の秀峰」 写真展開催のお知らせ

山岳写真家の風見武秀氏の標記写真展が下記の通り開催されますのでご案内致します。

記

期間 6月24日(木)～30日(水)

場所 新宿・野村ビル1F エントランスホール

### 東京集会のお知らせ

6月の東京集会は、昨年の春にチョー・オユーに出かけられた大野雅久氏を講師にお迎えして下記の通り行いますので会員の皆さん！友人などお誘いの上是非お出かけ下さい。

大野さんは日本・ネパール合同チョー・オユー登山隊でマネージャーも務められ活躍された方です。スライドを交えながら楽しい夕べを送りたいと思います。

記

日時 6月28日(月) p.m 7:00～

場所 HAJ ルーム

### 高所食の新製品

(株)エムパイヤフーズからこのたび、「ラフコアウトドアーフーズ」シリーズとして、いろいろな日本の味が発売されました。登山隊のご用命には若干の割引サービスをするそうですのでご利用下さい。

(新製品) 五目飯, おかゆ, きんぴら煮, ひじき煮, 卵の花煮, ひき割納豆, 野沢菜漬, なす漬, たまねぎ, じゃがいも, ほうれん草, 人参(イチウ切), ねぎ(スライス), 油揚げ, 味噌汁, 切干大根, 大根おろし。

連絡先 (株) エムバイヤフーズ  
東京都港区芝5-34-6 新田町ビル  
TEL 03(455)1941 (代)

### 会員名簿の件

HAJ 事務局では只今, 新しい会員名簿を作成しておりますので, 住所, 勤務先等に変更のあった方は至急, HAJ 事務局までご連絡下さい。

連絡先 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1  
淀橋食糧ビル506  
日本ヒマラヤ協会

### 82'藤江幾太郎 山の画展開催

藤江幾太郎先生の北海道から九州まで, 日本の山々とネパールの作品(油100~0号)30点が出品される画展が下記の通り開催されます。

記

日時 6月29日(火)~7月4日(日)  
11:00~18:30 (最終日17:00)  
場所 朝日アートギャラリー

## トピックス

### 82年クン登山学校隊 富士山合宿報告

'82年クン登山学校隊は, ゴールデンウィークの5月1日から3日にかけて富士山で合宿を実施しました。

全員が参加して行われた合宿ですが, 生憎の悪天候のため, 行動の方は9合5勺での幕営にとどまりました。下山後は山麓の民宿で各担当のミー

ティングが行われ, 最終日は付近の雑木林でユマリングの訓練を行って散会となりました。

### ブリクティ隊からの便り(第1便)

ナマスカール! キャラバン途中からの第1便です。

予定通りポカラに4月23日午後到着。夕立の中の「ヒマラヤン・ホテル」入りでしたが, 3日前にカトマンズより送ったナイケの働きで, 1泊したのみで, 翌24日朝10時にはポカラを出ることができました。例によって予定よりポーターが増え計127名(内ナイケ2名)となりました。カトマンズからは古いポーター達が集って来て, 何と52名もが来ています。今後の働きが楽しみです。

今日でキャラバン4日目, 有名なゴラパニの丘泊りです。我々の高度計で2,820m, アンナ・サウス, ニルギリ, ダウラ山群が顔を出してくれました。

初日は, スイケット, カーレ, ヒレ(ティルケドンガの少し前)と泊って来ましたが連日, 午後からの夕立(シャワー)でヒマラヤはチョロッと見えただけでしたが, 明日の朝は, きっと皆を喜ばせてくれるものと思います。

ネパール人メンバーを紹介しておきますと, リエゾン・オフィサーのB・B・タパ。体操の先生でいい男。真面目一徹過ぎるサブ・インスペクターである。

そして, ネパール人メンバーが2人。タシ・シャンブーとキシュール・バッタライの2人共, 登山家と認められる程, 山好きだし, タシはマナンの登山学校の時, チュール西峰, 東峰, ビサン・ピーク, ニアッタ・ピークなどに登っている。イタリアンの合同隊のメンバーでもあり, 昨冬のフランス, イヴァン・ジェラル・ディーンのマカール西壁の時のリエゾン。登り調子だし快適な男。

キシュールは, マナンの登山学校卒でライジング・ネパール紙の記者。トレッキングは数多く, 東から西まで仕事のほかでも歩いている。特に'75年にハーマン・ドース(英国の学者)とムスタン調査を6ヶ月もやっているのも物凄く便利です。英語が抜群だし, タシ同様, 紳士で丁度ラビさん

(註：カンチのL・O) みたいにいい男。

そしてケサン・ナムギャル氏、ラサの貴族の出で東京外語大や国士館で講師をしていたチベット人。前ムスタン国王の娘婿。物凄いジェントルマンで勿論、英語、日本語、ネパール語ができるし、ムスタンに毎年行っているいろいろなので今回もまた、いろいろやってくれると言っている。

いずれにしても、日本人11名、ブラーマン1名、シェルパ1名、チベット人1名、チェトリ(リエゾン)1名と云うチームの割には、それぞれがそれぞれをたてながらムードとしては、なかなかいいムードです。このまま、何とか成功のまま終わりたいと念願しています。

また次の便で詳しく書きますが、今後、明日から4日間でジョムソン(タトパニ、ガサ、ツクチュ、ジョムソン)。そして2日位、ポーターを入れ替えて上へ。B・Cまで7日をみているが、10日はかかりそう。まして氷河までとなると、またカトマンズ・ポーターに活躍して貰うことになるでしょう。

今回は、取り急ぎ全員元気でキャラバンを続けているということ遅咲きのシャクナゲが咲くゴラパニよりナマスカルです。 菊地 薫

### ブリクティ隊からの便り(第2便)

5月5日、タンゲ村よりナマステです。

隊員一同、皆元気でキャラバンも何とか順調です。

4月28日、ゴラパニの丘でダウラギリ山群とアンナ・サウス、ファンクを見ながらメールを送って以来ですが、その後、タトパニ、ガサ、ツクチュとまずまずのペースでキャラバンを進め、5月1日に無事ジョムソンに着きました。然し、ここで一騒動持ち上がりしました。我々のL・O(リエゾン・オフィサー)が、ムスタンと云うことでかなり神経質になっておりアプローチ・ルートがチャンラ経由が駄目でタンゲ経由となってしまいました。

タック・コーラの素晴らしい景観。連日雨だったのがドライ・エリアに入るや毎日、ダウラギリやニルギリを眺めながらの素晴らしいキャラバンと

は裏腹にL・Oの神経質ぶりには悩まされております。

兎も角、何とかジョムソンを1日の停滞もなく出発し、5月2日、カグベニに着きました。

やはり、カグベニの上は全くのチベットで、タンベ、チョサンと村を過ぎ、チョサンの直ぐ上の小さな村、チョナム(ラタンの下方1km)で5月3日は幕営しました。

このチョサン(チョナム)からはカリ・ガンダキの左岸の大きな河岸段丘の丘を越えて昨夜は山中にビバーク。4,000mの峠越えのある辛い道でした。そして5月5日、本日、ここ3,300mのタンゲ村。全くのムスタンの村ですが、ここまで道頭1つの村もない厳しいキャラバン(2日間)となりました。でも、ぐんぐん近づくムスタンの谷とチベットのプラトー、何か空怖しさすら感じさせる「孫悟空」の世界です。ほんの少しの緑と全くの砂漠。雪山はガンダキの両岸にほんの少しだけ、やはり、トランスヒマラヤです。

明日からは、ここタンゲからB・Cに向けてトランスポートです。40人のKTMポーターを残してますので偵察とルート作業を含め、テー村からコーラ沿い(テーチェンからナムタ・コーラ)に5日間でもB・Cと云う所でしょうか?

今、予定より2日先行してますので5月10日ごろはB・C入り出来ると思われま。

いずれB・C建設については次便になりますが、取材との兼ね合いもあり、ここをベース・ハウス、テーあたりに仮B・Cを置いてやろうと思っています。(山から遠いので大分苦労していますが)20日間もあれば登れる山でしょう。丁度、5月一杯かかりそうです。調子(体調)は、皆まずまずなので今の所安心です。ポーター管理はじめ全て(金、医療、装備、etc……)が小生処理なので少し大変ですが、5月中には何とか結着をと思ってます。

取り急ぎ乱筆にて宣しくご判読の程。 草々、  
タンゲ・コーラとヤク・コーラの出合のひっそりとしたオアシスにひっそりと眠るチベットの村・  
3,300mのタンゲにて キクチ

(長い便りでしたので途中、割愛致しました。)

# 昭和57年度

## 日本ヒマラヤ協会通常総会報告

本年度通常総会は、5月最後の日曜日に八丁堀の東京都勤労福祉会館で行われました。当日はヒマラヤ登山実践研究会の旗上げ式もあったことから東北・四国・中国地方など、遠方からの会員の方も出席され、次のような経緯で無事終了しましたのでご報告致します。

1. 日時 昭和57年5月30日(日)午後1時15分～2時35分
2. 場所 東京都勤労福祉会館
3. 出席者 本人出席25名, 委任状提出者241名, 計266名。(定款第25条の規定により1/3以上の出席により成立。3月31日現在会員数731名, 4月1日以降入会者16名, 計747名が現会員数)

#### 4. 次第

- 1) 開会 柴田会長に代って山倉副会長が開会を宣し、挨拶を行った

「昨年、本協会が発足してから初めての大きな遭難事故に見舞われ、ナンダ・カートに於いて7名ものカメラードを失なうこととなり誠に悲しみの深い年となりました。会員の皆様には一早く暖かい御支援・御協力を賜りました御陰で協会の方もなんとか立ち直りを計ることが出来ました。

57年度は、より一層の内容の充実に力を注ぎたい。」

議長には定款の定めるところにより山倉副会長があたり、書記に尾形好雄(事務局職員)、議事録署名人に出席者の中から稲垣公平氏、飛田和夫氏を選んで議事に入った。

#### 2) 議事

議案各号に関して稲田専務理事と山森事務局長より説明がなされ質議に入った。

##### ①議案第1号 昭和56年度事業報告について

別紙報告を異議なく承認した。56年度は、カンチェンジュンが特別事業が終ったあとナンダ・カートの遭難事故が起こり、この

事後処理のために、あらゆる一般事業に支障をきたした。

##### ②議案第2号 昭和56年度収支決算報告について

別紙報告について、黒川、藤江両監事による監査報告のあと審議に入り、異議なく承認した。

##### ③議案第3号 昭和57年度事業計画について

57年度は、別紙計画(案)のとおり専門研究会の統廃再編と新規研究会を育成して充実した実践活動を展開したい。また、「ヒマラヤ研究所」の具体化を推進強化し、この機能と連携した情報管理事業、ナンダ・カート遭難事故によって滞っている出版事業等の軌道復帰に力を注ぐ旨の説明があり質議を行った。異議なく承認した。

##### ④議案第4号 昭和57年度収支予算書について

別紙予算(案)のとおり一般会計、ヒマラヤ研究所会計、別途会計予算の提案があった。負担金収入、ナンダ・カートカンパ収入について質議があり、負担金についてはカンチェンジュンが学術遠征隊員への追徴金であり、ナンダ・カートカンパは引き続き第二次カンパ活動として新規加入者等にも呼びかけていく所存であるとの説明があった。

また、管理費における給与・手当が増額された点について質議があったが、今年度から事務局体制の強化から専従事務局員2

名、パート1名の陣容による増額であることが説明された。

その他、異議なく承認した。

⑤議案第5号 役員および評議員の一部補充について

近藤龍良理事の辞任に伴ない残任期間の補充として事務局の尾形好雄会員に理事をお願いしたい旨の提案がされた。異議なく承認された。

九州、四国、中国の3地区を主体として評議員を一部補充したい旨の提案がされた。

評議員は各地区から人選された人を理事会で承認した上、総会で決定となる訳であるが、そうなると1年間のブランクが生ずることとなるので理事会に承認・決定というのを一任して頂きたいとの補足説明があり、異議なく承認された。

⑥議案第6号 会員の除名について

定款第7条に従って過去3年間会費を滞納した会員77名が除名対象者として上げられた。

再三の督促にも応じない77名の除名は、異議なく承認された。

(尚、この77名の除名者数は会員総数747名から差し引いてあるので収入支出予算に変動はないことが補足された。)

5. その他

事務局連絡

(閉会 14時35分)

※ 総会終了後、同会場において、小方全弘氏による「最近のブータンを語る」講演会を予定しておりましたが、当日、講師の都合に依り開演出来ませんでした事を深くお詫び申し上げます。

## 昭和56年度事業報告書

自 昭和56年4月1日

至 昭和57年3月31日

I 定款第4条第1項にもとづく事業（ヒマラヤに関する総合的な資料と情報の収集・整理・保存およびそれらの利用希望者に対する便宜

供与）

1. 情報管理事業

昭和57年度より「日本ヒマラヤ研究所」へ全面移管を前提として下記の事業を行った。

- 1) 会員内外に対する情報提供と登山・踏査・トレッキング計画の企画・研究等の指導。
- 2) 文献・諸資料のレファレンスサービス（なお、地図等簡単に入手可能なものについては遠慮いただいた。）

2. 日本ヒマラヤ研究所設置事業

設置のため下記の基礎的検討を行い一部体制づくりに着手した。

- 1) 施設・設備の設置と運営計画の策定。
- 2) 文献調査と調達開始。
- 3) 研究および情報管理システムの検討。
- 4) 財務渉外。研究所の設置運営に必要な財政基盤確立のため、資金導入について交渉した。

II 定款第4条第2項にもとづく事業（登山をはじめとする野外活動と関連する諸分野に関する研究活動と成果の公表）

1. 調査研究事業

1) 専門研究活動の再編強化と育成

ブータン研・チベット研・東部ヒマラヤ研・ラダック研・ワハン研・宗教研・地図研等既存研究会の再編について検討した。又、新規研究会については、指導の結果「ヒマラヤ登山実践研究会」が発足する予定である。

2) 高所登山における事故防止に関する調査研究。

続発する高所登山の事故を分析し防止のため研究成果をヒマラヤ119号、山と溪谷535号、岳人415号等に発表し、HAJ主催の日本ヒマラヤ会議、日本山岳協会主催・海外登山遭難対策研修会、東京都山岳連盟主催・海外登山研究会を通して発表した。

2. 出版事業（研究・報告）

- 1) カンチェンジュンガ学術遠征隊報告書の発行（7月）。
- 2) ヒマラヤ登山「やること、やるべきでな

いこと」翻訳出版(57年1月)

- 3) インドヒマラヤの手引(初版)発行(57年1月)
- 4) 登山学校・ケダルナート隊報告書準備。
- 5) 登山学校・ナンダカート隊事故報告書準備。
- 6) カンチェンジュンガ学術遠征隊公式報告書発行準備。
- 7) ランタン・リ隊報告書発行準備。

### 3. 関連学術事業

ネパールへ1名派遣。

## Ⅲ 定款第4条第3項にもとづく事業(ヒマラヤへの登山をはじめとする野外活動・研究・調査などの団体の派遣)

### 1. カンチェンジュンガ学術遠征派遣事業

登山隊22名を派遣し5月9日、主峰に6名、ヤルン・カンに5名が立ったが縦走は中止した。学術隊を第一次～第三次にわたって派遣し成果を上げた。(なお、この事業は(財)車両競技公益資金記念財団の助成により行われた。)

### 2. 高所登山事業

#### 1) ネパール・ヒマラヤ遠征隊と派遣

- イ) ランタン・リ(7,239m)に7名を派遣し10月10日、初登頂に成功し合計6名が登頂した。
- ロ) ブリクテイ(6,720m)をポスト・モンズーンに予定したが、アプローチの事情で57年度に延期された。
- ハ) 冬期エベレスト(8,848m)西稜を計画し出発直前であったが、登山学校の事故により中止した。

#### 2) インド・ヒマラヤ遠征の具体化

サセル・カンリ(7,672m)の渉外を行い、パンディム(6,691m)偵察隊は中止し、渉外のみで終わった。

#### 3) 登山許可申請と取得

- イ) ネパール・ヒマラヤ
  - ・57年秋のテリッツオ・ピーク(7,134)を申請したが不許可となった。
  - ・61/62年冬期エベレスト(8,848m)等の渉外を行った。

#### 4) ポスト・カンチェンジュンガ計画の樹立

高所登山委員会において検討し、60年K<sub>2</sub>集中、61/62年冬期エベレスト構想を策定し、冬期エベレストについては渉外を行った。

### 3. 野外活動事業

ムスタン王国踏査隊の派遣。

10名の隊を56年9月～10月に報道機関との提携のもとに派遣する予定であったが、許可条件等で高所登山事業へ移管した。

## Ⅳ 定款第4条第4項にもとづく事業(機関誌その他の刊行物、登山・野外活動訓練事業、研修、各種の会合によるこの分野の健全な発達をはかるための指導・啓もう活動)

### 1. 機関誌発行事業

「ヒマラヤ」第114号～125号の発刊(第三種郵便物扱、毎月1日発行、毎号24～30ページ)

### 2. 出版事業

- 1) 年報「HIMALAYA」第2号発行準備を行った。
- 2) 英字誌「ザ・ジャパニーズ・ヒマラヤン・ジャーナル」第1号の発行準備。(58年度当初に発行予定)

### 3. ヒマラヤ登山学校事業

#### 1) 第5回ヒマラヤ登山学校の実施。

インド、ナンダ・カート(6,611m)にインストラクター2名を含む8名を派遣したが、9月27日から28日にかけて、第3キャンプ(約6,000m)に滞在していた7名が消息を断ち遭難となった。

#### 2) ナンダ・カート峰搜索隊の派遣

上記遭難により、HAJ・遺族との合意に基づいて搜索隊を派遣(10月～12月)したが成果は上がらなかった。

#### 3) 第6回ヒマラヤ登山学校の準備・訓練

クン(7,077m)へインストラクター4名を含む16名を派遣する計画で、隊編成と訓練および実務準備を推進中。

#### 4) 第7回ヒマラヤ登山学校の許可取得。58年度実施予定で進めた。(ヌン・7,135m許可内定)

#### 5) インストラクターの検定と登録

登山学校指導員（インストラクター）の候補者の選定を行った。

指導員との契約原案を策定した。

#### 4. 野外活動事業（セミナートレッキング）

- 1) 第2回セミナートレッキング隊派遣準備。  
ネパール・ヒマラヤ、ロールワリン地域へ20名（インストラクター2名含む）を12月～57年1月（21日間）に派遣すべく計画したが中止。
- 2) 第2回セミナートレッキング隊派遣。  
カラコルム・バツラ山群へ10名を派遣すべく推進中。
- 3) 第3回セミナートレッキング隊派遣準備。  
57年12月～58年1月の予定で隊編成を進める。

#### 5. 指導・啓もう事業

- 1) 日本ヒマラヤ会議の開催。  
6月～57年3月、札幌・秋田・京都・仙台・前橋・高知・福岡で日山協との連携のもとに実施した。各会場20～60名。
- 2) 地域ヒマラヤ集会の開催。  
広島・長崎で情報を中心に実施、各会場20～30名。
- 3) 定例集会。  
東京（毎月）・札幌（隔月）で毎回のテーマにもとづいて開催した。
- 4) 小集会。  
各地で要請および必要に応じて開催した。
- 5) インド・ヒマラヤ研究集会。  
8月に札幌でインド登山財団総裁H・C・サリーン氏を迎えて行った。
- 6) 第3回インド・ヒマラヤ会議の開催。  
旧インド・ヒマラヤ情報交換会。56年隊の報告および57年隊の計画検討・研究。  
57年1月（東京）30名。
- 7) ネパール・ヒマラヤ研究会。  
7月に東京でネパール政府観光省登山部長S・Rシャルマ氏を迎えて行った。35名。
- 8) 野外活動研修会（秋のヒマラヤ集会）。  
セミナー・トレッキング中止のため中止した。

9) 高所登山懇談会の開催。有識者による討論会（公開）。

ナンダ・カート遭難事故のため中止した。

#### 10) 公式報告会。

カンチエンジュンガ隊（9月）東京。80名、ランタン・リ隊（12日）長井。100名

#### 11) 壮行会

各隊について出発約1ヶ月前に行った。計画発表と地域事情伝達。

V 定款第4条第5項にもとづく事業（その他、前条の目的を達成するために必要と認める事業）

#### 1. 国際交流事業

##### 1) 外国代表の招請。

インド登山財団総裁H・C・サリーン氏を招請し、パーティ懇談会および研究会を開催した。（8月）

ネパール政府観光省登山部長S・R・シャルマ氏を招請し、パーティ懇談会および研究会を開催した。（7月）

##### 2) ヒマラヤ諸国登山関係者との懇談。

ネパール登山協会（N・M・A）幹事N・M・S・プラダハン氏が来日し、有志で歓迎会を行って情報交換を行った。（2月）東京20名。

##### 3) 代表派遣。

ネパール、ネパール登山協会（N・M・A）へ1名を派遣し合同登山についての情報交換を行った。

##### 4) 各国山岳団体・機関との情報提携。

英・米・仏・スイス・カナダ・ニュージーランド・スペイン・ポーランド・ドイツ・チェコ・オーストリア・台湾・コーリア・その他と機関誌交換および情報提携を行った。

#### 2. 国内関連団体との協調

日本山岳協会・日本山岳会・その他関係団体と事業提携・協力・情報交換などを行った。

#### 3. 組織の整備

##### 1) 社団法人設立許可。

年度内の早い時期の許可を予定し、当局

の御指導を得て進めたが、現在も進行中。

2) 基本財産の充実。

引き続き拠出金・寄附金等により推進。

3) 執行体制の強化。

専門委員会スタッフの増員。

4. その他

1) 運営諸程・規則等の整備。法人として必要とされるものの整備。

2) 事務整備。事務処理方式の合理化と統一。

3) ナンダ・カート事故関係。

イ) 説明会。10月4日、御家族・友人・報道に対して行った。(東京)

ロ) 隊長帰国報告。10月31日、一同上-

ハ) 捜索隊帰国報告。12月20日、一同上-

ニ) 合同追悼会。12月20日、御家族・友人・報道の参会を得て執り行った。(東京)

ホ) 各家葬儀。1月~4月に各家で執り行なわれ関係者が参列した。

## 昭和56年度収支決算報告

自 昭和56年 4月 1日

至 昭和57年 3月 31日

### I 一般会計

#### 収入の部

(単位:円)

勘定科目	大科目	中科目	予算額	決算額	増・減(△)
基本財産運用収入	( 410,000 )	( 130,980 )	( 410,000 )	( 130,980 )	( △ 279,020 )
		基本財産利息収入	410,000	130,980	△ 279,020
入会金収入	( 550,000 )	( 420,000 )	550,000	420,000	△ 130,000
		入会金収入	550,000	420,000	△ 130,000
会費収入	( 5,560,000 )	( 2,575,840 )	5,560,000	2,475,840	( △ 2,984,160 )
		通常会員会費収入	5,160,000	2,475,840	△ 2,684,160
		賛助会員会費収入	400,000	100,000	△ 300,000
事業収入	( 24,000,000 )	( 7,751,627 )	( 24,000,000 )	( 7,751,627 )	( △ 16,248,373 )
		情報管理事業	50,000	0	△ 50,000
		調査研究事業	30,000	0	△ 30,000
		登山学校事業	10,000,000	5,380,000	△ 4,620,000
		高所登山事業	1,040,000	80,000	△ 960,000
		野外活動事業	3,800,000	0	△ 3,800,000
		指導啓もう事業	1,700,000	507,400	△ 1,192,600
		機関誌発行事業	1,400,000	848,350	△ 551,650
		出版事業	5,050,000	358,142	△ 4,691,858
		関連学術事業	100,000	0	△ 100,000
		国際交流事業	780,000	577,735	△ 202,265
		その他事業	50,000	0	△ 50,000

雑収入	( 144,000 )	( 1,276,014 )	( 1,132,014 )
	受取利息収入	50,000	116,014
	賃貸料収入	24,000	10,000
	その他雑収入	70,000	1,080,000
繰入金収入	( 540,000 )	( 25,651 )	( △ 514,349 )
	特別会計繰入金	0	0
	別途会計繰入金	540,000	25,651
前期繰越剰余金	( 13,347 )	( 7,835,099 )	( 7,821,752 )
	前期繰越剰余金	13,347	13,347
	前期修正	( 1,150,000 )	7,821,752
計	31,217,347	20,015,211	△ 11,202,136

#### 支出の部

(単位:円)

勘定科目	大科目	中科目	予算額	決算額	増・減(△)
管理費	( 8,136,000 )	( 8,116,769 )	( 8,136,000 )	( 8,116,769 )	( △ 19,231 )
		給料・手当	4,400,000	4,560,494	160,494
		旅費交通費	250,000	307,210	57,210
		通信運搬費	330,000	339,940	9,940
		電話費	480,000	559,270	79,270
		文具費	90,000	29,089	△ 60,911
		消耗品費	40,000	85,910	45,910
		賞給費	20,000	10,600	△ 9,400
		什器備品費	250,000	0	△ 250,000
		印刷製本費	550,000	477,360	△ 72,640
		図書費	40,000	44,990	4,990
		賃貸料	1,200,000	1,233,900	33,900
		光熱水費	120,000	133,514	13,514
		会議費	70,000	93,955	23,955
		諸税金費	30,000	10,000	△ 20,000
		交際費	30,000	4,000	△ 26,000
		広報費	90,000	176,780	86,780
		福利厚生費	30,000	19,017	△ 10,983
		法人諸費	50,000	12,600	△ 37,400
		手数料	12,000	18,140	6,140
		諸謝金	10,000	0	△ 10,000
		雑費	44,000	0	△ 44,000
事業費	( 19,910,000 )	( 9,808,817 )	( 19,910,000 )	( 9,808,817 )	( △ 10,101,183 )
		情報管理事業費	40,000	0	△ 40,000
		調査研究事業費	100,000	0	△ 100,000
		登山学校事業費	7,800,000	4,254,761	△ 3,545,239
		高所登山事業費	930,000	271,702	△ 658,298
		野外活動事業費	3,200,000	0	△ 3,200,000
		指導啓もう事業費	1,220,000	1,036,718	△ 183,282
		機関誌発行事業費	1,900,000	2,237,125	337,125
		出版事業費	3,500,000	347,690	△ 3,152,310
		関連学術事業費	300,000	0	△ 300,000
		国際交流事業費	900,000	1,660,821	760,821
		その他事業費	20,000	0	△ 20,000
繰入金	( 2,670,000 )	( 2,077,485 )	( 2,670,000 )	( 2,077,485 )	( △ 592,515 )
		基本財産会計繰入金	1,370,000	0	△ 1,370,000
		退職給付引当繰入金支出	300,000	0	△ 300,000
		研究所会計繰入金支出	1,000,000	0	△ 1,000,000
		ナンダ・カート特別会計繰入金支出	0	2,077,485	2,077,485
予備費	500,000	( 0 )	500,000	( 0 )	△ 500,000
		予備費	500,000	0	△ 500,000
次期繰越	次期繰越	1,347	12,140	10,793	
計	31,217,347	20,015,211	11,202,136		

## II 基本財産会計

### 収入の部

(単位：円)

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
基本財産運用利息	410,000	130,980	△ 279,020
指定寄附金収入	2,000,000	0	△ 2,000,000
法人化拠出金収入	240,000	37,000	△ 203,000
終身会員収入	500,000	325,000	△ 175,000
一般会計繰入金収入	1,370,000	0	△ 1,370,000
雑収入	1,000	0	△ 1,000
前期繰越収支差額	7,058,750	7,058,750	0
計	11,579,750	7,551,730	△ 4,028,020

### 支出の部

(単位：円)

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
一般会計支出金	410,000	130,980	△ 279,020
雑費	10,000	0	△ 10,000
次期繰越収支差額	11,159,750	7,420,750	△ 3,739,000
計	11,579,750	7,551,730	△ 4,028,020

## III 別途会計

### 収入の部

(単位：円)

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
別途積立金運用利息	10,000	25,651	15,651
特別会計繰入金収入	1,020,000	0	△ 1,020,000
一般会計繰入金収入	300,000	0	△ 300,000
前期繰越収支差額	208,875	208,875	0
計	1,538,875	234,526	△ 1,304,349

### 支出の部

(単位：円)

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
一般会計繰入金支出	540,000	25,651	△ 514,349
次期繰越収支差額	998,875	208,875	△ 790,000
(退職金引当)	( 500,000)		
(運営基金)	( 498,875)		
計	1,538,875	234,526	△ 1,304,349

## IV ヒマラヤ研究所特別会計

### 収入の部

(単位：円)

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
一般会計繰入金収入	1,000,000	0	△ 1,000,000
会費収入	100,000	0	△ 100,000
寄附金収入	1,500,000	0	△ 1,500,000
助成金収入	4,000,000	0	△ 4,000,000
雑収入	50,000	0	△ 50,000
計	6,650,000	0	△ 6,650,000

### 支出の部

(単位：円)

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
管理費	2,500,000	0	△ 2,500,000
初度調弁費	800,000	0	△ 800,000
事業費	3,230,000	0	△ 3,200,000
(文献費)	( 2,200,000)	( 0)	( △ 2,200,000)
(調査研究費)	( 380,000)	( 0)	( △ 380,000)
(出版費)	( 500,000)	( 0)	( △ 500,000)
(交流費)	( 150,000)	( 0)	( △ 150,000)
予備費	120,000	0	△ 120,000
計	6,650,000	0	△ 6,650,000

## V ナンダカート事故特別会計

### 収入の部

(単位：円)

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
カンパ金収入		3,190,000	
保険金収入		6,000,000	
捜索隊負担金収入		8,995,000	
一般会計繰入金		2,077,485	
計		20,262,485	

### 支出の部

(単位：円)

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
事故処理費		4,886,191	
捜索費		15,376,294	
計		20,262,485	

## 総括収入計算表

(単位：円)

収入の部		支出の部	
種別	金額	種別	金額
入会金収入	420,000	一般会計管理費	8,116,769
会費収入	2,575,840	一般会計事業費	9,808,817
事業収入	7,751,627	ナンダ・カート事故処理費	4,886,191
雑収入	1,276,014	ナンダ・カート搜索費	15,376,294
前期修正	7,821,752		
基本財産運用収入	130,980		
特別会計繰入金	25,651		
カンパ収入	3,190,000		
保険金収入	6,000,000		
搜索隊負担金収入	8,995,000		
前期繰越	13,347	次期繰越	12,140
計	38,200,211	計	38,200,211

## 貸借対照表

昭和57年3月31日現在 (単位：円)

借方		貸方	
現金	19,532	未払金	652,000
普通預金	6,669,158	報告書引当	1,500,000
金銭信託	2,941,500	預り金	722,000
郵便振替	554,566	前受金	6,833,007
未収金	5,097,250	借入金	3,700,000
備品	2,139,466	別途積立金	208,875
登山装備	3,127,000	基本財産	7,420,750
敷金	320,000	次期繰越	12,140
保証金	100,000		
電話加入権	80,300		
計	21,048,772	計	21,048,772

## 財産目録

(単位：円)

種別	摘要	金額
1. 現金		( 19,532 )
	手元現金	19,532
2. 普通預金		( 6,669,158 )
	三菱銀行新宿支店 4455421	822,465
	三菱銀行赤坂支店 0130785	4,465,043
	東商信用金庫新宿支店 063468	169,457
	第一勧業銀行高田馬場支店 1099791	1,018,740
	富士銀行高田馬場支店 593803	22,321
	住友信託銀行新宿支店 5136696	167,819

(単位：円)

種別	摘要	金額
	住友銀行新宿支店 91816	584
	第一勧業銀行高田馬場支店 1259292	2,729
3. 金銭信託		( 2,941,500 )
	住友信託銀行新宿支店 12285 127768	2,941,500
	127769 127770	
4. 郵便振替		( 554,566 )
	東京 0—48954	517,868
	東京 0—164655	36,698
5. 未収金		( 5,097,250 )
	終身会員申込者未収金	640,250
	指定寄附金申込者未収金	3,600,000
	機関誌広告料未収金	857,000
6. 敷金		320,000
	淀橋食糧ビル 506号敷金	320,000
7. 保証金		( 100,000 )
	新宿電話局臨時電話架設保証金	100,000
8. 電話加入権		( 80,300 )
	電話加入権 03—367—8521	80,300
9. 備品		( 2,139,466 )
	協会事務所備品	2,139,466
10. 登山装備		3,127,000
	在インド(ニューデリー)登山装備一式	1,377,000
	在ネパール(カトマンズ)登山装備一式	1,750,000
	資産合計	21,048,772
11. 未払金		( 652,000 )
	㈱石倉印刷紙工(機関誌印刷代)	117,000
	国際電話料(国際電話料)	350,000
	柴田金之助他9名(借入金利息)	185,000
12. 報告書引当金		( 1,500,000 )
	ナンダ・カート報告書費	1,500,000
13. 預り金		( 722,000 )
	堂本暁子(ブリクテイ登山)	650,000
	宮坂憲一他7名	72,000
14. 前受金		( 6,833,007 )
	宮崎久夫他88名(昭和57年度以降会費)	494,400
	長 繁夫12名(57年度クン登山学校)	4,500,000
	天城敏彦(58年度ヌン登山学校)	100,000
	金子英一他4名(ブリクテイ登山)	1,738,607
15. 借入金		( 3,700,000 )
	柴田金之助(ナンダ・カート事故用)	2,000,000
	安中 秀子(同 上)	500,000
	水野 勉(同 上)	300,000
	小林 英見(同 上)	200,000
	沖 允人(同 上)	200,000
	岩水 龍峰(同 上)	200,000
	藤江幾太郎(同 上)	100,000
	館野 秀夫(同 上)	100,000
	阿部 淳(同 上)	100,000
	負債・引当金合計	13,407,007
	差引正味財産	7,641,765

備品明細

(単位：円)

品名	数量	評価額	備考
宛名カードケース	2	70,000	
宛名印刷機	1	120,000	
英文タイプライター	1	60,000	
英文タイプライター	1	28,000	
スライドプロジェクター	1	30,000	
丸いす	10	50,000	
スチール机	1	80,000	
スチール・キャビネット	1	120,000	
スクリーン	1	20,000	
小型テープレコーダー	1	13,760	
掃除機	1	13,040	
和文タイプライター	1	212,696	
会旗		69,000	
折たたみいす	15	45,000	
片そで机・いす	2	31,000	
両そで机・いす	1	22,000	
ファイリング・キャビネット	1	10,000	
書庫	1	25,000	
テーブル	2	22,000	
書だな	2	13,000	
レターケース	1	12,000	
ガストープ	1	14,900	
茶だんす	1	16,700	
ふとん	2	17,100	
電子リコピー	1	710,000	
タイプスタンド2型	1	11,250	
黒板	1	11,475	
ペーパーカッター	1	10,875	
ホワイトボード	1	12,000	
スライドプロジェクター	1	41,670	
テープレコーダー(ソニー)	1	31,000	
会旗(大)	2	33,000	
エアコン	1	101,000	
書だな	2	62,000	
計		2,139,466	

昭和57年度事業計画

自 昭和57年4月1日  
至 昭和58年3月31日

I 定款第4条第1項にもとづく事業(ヒマラヤに関する総合的な資料と情報の収集・整理・保存およびそれらの利用希望者に対する便宜供与)

1. 情報管理事業

「日本ヒマラヤ研究所」の機能と連携して  
1) 会員内外に対する情報提供とトレッキング・踏査・登山計画の企画・研究等の指導。

2) 文献、諸資料のレファレンスサービス(電子コピー)。

2. 日本ヒマラヤ研究所設置事業

助成金を得て設置し、本活動の一方の軸とする。

1) 設備充実と運営開始。

2) 文献調査と調達開始。

3) 情報管理システム整備と研究方法の策定。

4) 財務渉外と専任職員配置。

助成金導入、年内に研究員の配置を進める。

II 定款第4条第2項にもとづく事業(登山をはじめとする野外活動と関連する諸分野に関する研究活動と成果の公表)

1. 調査研究事業

1) 専門研究会活動の再編強化と育成

ブータン研・チベット研・東部ヒマラヤ研・ラダック研・ワハン研・宗教研・地図研等既存研究会の統廃再編と新規研究会の育成。

2) 高所登山における事故防止に関する調査研究

2. 出版事業(研究・報告)

1) カンチエンジュンガ学術遠征隊公式報告書の発行(12月)。

2) カラコルム写真集の編集(58年度発行予定)

3) ランタン・リ隊報告書の発行(7月)

4) ナンダ・カート事故報告書の発行(7月)

刊行物棚卸現在高

昭和57年3月31日現在

刊行物名	数量
インド・ヒマラヤのすべて	153
シュルバの履歴書	32
カンジュラルワ初登頂	153
ヒマラヤ・年報1980	237
中央アジア・シルクロード	187
ヒマラヤ登山 やること、やるべきでないこと	609
日本カンチエンジュンガ学術遠征隊報告	255
インドヒマラヤの手引	6
ヒマラヤを歩き、そして登るために	130
機関誌「ヒマラヤ」合本(101-120)	8
機関誌「ヒマラヤ」	3,100

- 5) ケダルナート隊報告書の発行(6月)
- 6) ムスタン踏査報告書の発行(57年度発行)
- 7) 各隊報告書の編集(ネパール, インド, 登山学校)
- 8) 「ヒマラヤ」英文ダイジェスト版の発行

### 3. 関連学術事業

ネパールへ1名派遣。

## III 定款第4条第3項にもとづく事業(ヒマラヤへの登山をはじめとする野外活動・研究・調査などの団体の派遣)

### 1. 高所登山事業

- 1) ブリクテイ(6,720m)登山の継続。  
56年度から引き続き登山中, 11名派遣。
- 2) 冬期マナスル(8,156m)登山隊の派遣。  
57年10月～58年2月に派遣(4名)。
- 3) チョー・オユー(8,153m)登山隊の派遣。  
58年2月～6月に派遣(6名)。
- 4) K2(8,611m), ナンガパルバット(8,125m)調査隊の派遣。  
57年8月～9月に派遣(4名)。
- 5) 直轄プロジェクトの推進。  
中期計画によるカンチェンジュンガ遠征終了後の次期プロジェクトとして次の計画を推進する。  
イ) 昭和60年度(1985年)K2(8,611m)集中登山。  
ロ) 昭和61年度(1986年)冬期エベレスト(8,848m)西稜登山。
- 6) インド・ヒマラヤ未解禁峰への継続渉外。  
サセール・カンリ(7,672m), バンデイム(6,691m), シニオル・チュー(6,887m), カメット(7,756m), ハルデイオール(7,151m)等の登山について継続して渉外を行い早期実現を目指す。
- 7) 登山許可申請と取得  
ネパール・インド・パキスタン・中国に関して昭和58年度以降の許可取得と準備を行う。
- 8) 壮年登山隊企画準備  
壮年会員を中心とした登山隊の実現を目指して企画・許可取得準備を進める。
- 9) 地域登山計画の推進

各地域会員を主体とした登山隊派遣について各地域会員との懇談・調査を進め, その実現を積極的に推進する。

2. 野外活動事業(セミナー・トレッキングを除く)  
中国・ソ連・ブータン等で各種の踏査隊派遣について企画準備を行う。

## IV 定款第4条第4項にもとづく事業(機関誌その他の刊行物, 登山・野外活動訓練事業, 研修, 各種の会合によるこの分野の健全な発達をはかるための指導・啓もう活動)

### 1. 機関誌発行事業

「ヒマラヤ」第126号～137号の発刊。  
(毎号24～30ページ)

### 2. 出版事業

- 1) 年報「HIMALAYA」第2号発刊(8月)および第3号編集。
- 2) 英字誌「ザ・ジャパニーズ・ヒマラヤン・ジャーナル」第1号の発行準備。(58年度当初に発行予定)
- 3) 高所登山の手引発行。  
各地域別登山の実務を中心とした手引書を発行する。(改訂を重ねる)
- 4) カンチェンジュンガ・ノンフィクションの発行。

### 3. ヒマラヤ登山学校事業

- 1) 第6回ヒマラヤ登山学校の実施。  
インド, クン(7,077m)にインストラクター4名を含む17名を派遣する。(7月～8月)
- 2) 第7回ヒマラヤ登山学校の準備・訓練。  
インド, ヌン(7,135m)へインストラクター4名を含む20名を派遣する計画で, 隊編成と訓練および実務準備をすすめる。
- 3) 第8回ヒマラヤ登山学校の許可取得。  
59年実施予定で進める。
- 4) インストラクターの検定と登録。  
登山学校指導員(インストラクター)の検定を実施し, 名簿に登録する。
- 5) 指導要項等の策定。  
登山学校実施に際しての隊員指導等の内容について登山学校委員会で策定する。

### 4. 野外活動事業(セミナートレッキング)

- 1) 第2回セミナー・トレッキング隊派遣。  
パキスタン、カラコルム・パツラ山群へ  
10名を派遣。7月～8月(21日間)
  - 2) 第3回セミナー・トレッキング隊派遣準備。  
58年度の予定で隊編成を進める。
  - 3) フィールド・ワーク講座の実施。  
セミナー・トレッキング希望者を中心に  
年間継続した講座を開設し、セミナー・  
トレッキングの充実を図る。
5. 指導・啓もう事業
- 1) 日本ヒマラヤ会議の開催。  
6月～58年3月、青森、仙台、前橋、高  
知、福岡、大阪、札幌で日山協との連携  
のもとに実施する。各会場40～50名。
  - 2) 地域ヒマラヤ集会の開催。  
水戸、富山、酒田、名古屋、広島、長崎  
で情報を中心に実施、各会場20～30名。
  - 3) 定例集会。  
東京(毎月)、札幌(隔月)。
  - 4) 小集会。  
各地で要請および必要に応じて開催する。
  - 5) カラコルム研究会の開催。  
パキスタン観光省登山局長アワン氏を迎  
えて東京で行う。(10月～12月)
  - 6) 第4回インド・ヒマラヤ会議の開催。  
旧インド・ヒマラヤ情報交換会。57年隊  
の報告および58年隊の計画検討・研究。  
(1月)東京。
  - 7) 野外活動研修会(秋のヒマラヤ集会)  
セミナー・トレッキング参加者を中心に  
9月(富士山)実施。
  - 8) 高所登山懇談会の開催。  
有識者による討論会(公開)11月、3月  
(東京)。
  - 9) 公式報告会  
ブリクテイ隊(7月)、登山学校・クン隊  
(10月)、セミナートレッキング・カラコ  
ルム隊(9月)、冬期マナスル隊(3月)  
等のスライド及び映画。
  - 10) 壮行会。  
各隊について出発1ヶ月前に行う。計画  
発表と地域事情伝達。
- V 定款第4条第5項にもとづく事業(その他、  
前条の目的を達成する為に必要と認める事業)
1. 国際交流事業
    - 1) 外国代表の招請。  
パキスタン政府観光省登山局長アワン氏  
を招請し研究会・懇談会パーティを開催  
する。(11月～12月)
    - 2) 代表派遣。  
ヒマラヤ諸国およびヨーロッパ諸国に代  
表を派遣し、各国関係機関・団体との交  
流を行い58年度以降の招請を行う。(併せ  
て情報網の整備)
    - 3) 各国山岳団体・機関との情報提携。  
米・英・仏・スイス・カナダ・ニュージ  
ーランド・スペイン・ポーランド・ドイ  
ツ・チェコ・オーストリア・台湾・コー  
リアその他と機関誌交換および情報提携  
を行う。
    - 4) 各ヒマラヤ諸国関係者との交流。  
来日したヒマラヤ諸国の登山関係者や在  
日大使館関係者と懇談する。(随時)
    - 5) パンフレットの作成。  
本協会を紹介する英文のパンフレットを  
作成する。
  2. 国内関連団体との協調  
日本山岳協会、その他関係団体と事業提  
携・協力・情報交換等を行う。
  3. 組織の整備
    - 1) 社団法人設立許可。  
年度内の早い時期の許可を予定し、当局  
の御指導を得て進める。
    - 2) 基本財産の充実。  
引き続き拠出金・寄附金等により推進。
    - 3) 執行体制の強化。  
専門委員会スタッフの増員。
    - 4) 会員拡大の強化。  
イ) 一般会員の新規加入のキャンペーン。  
ロ) 終身会員への働きかけ。  
ハ) 賛助会員の獲得。  
ニ) 国外会員の拡大。
    - 5) 会費未納の一掃。

6) 地域体制の検討

地域体制の確立を地域集会和併わせて推進すべく検討を行う。

4. その他

1) 運営諸程・規則等の整備。

法人として必要とされるものの整備。

2) 事務整備

事務処理方式の合理化と統一。

3) コンピューター導入の検討。

4) ナンダ・カート事故関係。

イ) 一周忌、並びにベース・キャンプ地訪問の実施。

ロ) インド側協力関係者への御礼。

5) 会員名簿等の発行

昭和57年度会員名簿と定款・諸規則を合せて発行。

昭和57年度収支予算書

自 昭和57年 4月 1日  
至 昭和58年 3月 31日

I 一般会計

収入の部

(単位:円)

勘定科目		予算額	前年度予算額	増・減(△)
大科目	中科目			
基本財産運用収入		( 250,000)	( 410,000)	(△ 160,000)
	基本財産利息収入	250,000	410,000	△ 160,000
入会金収入		( 750,000)	( 550,000)	( 200,000)
	入会金収入	750,000	550,000	200,000
会費収入		( 5,570,000)	( 5,560,000)	( 10,000)
	通常会員会費収入	4,570,000	5,160,000	△ 590,000
	賛助会員会費収入	1,000,000	400,000	600,000
事業収入		(24,914,000)	(24,000,000)	( 914,000)
	情報管理事業収入		50,000	△ 50,000
	調査研究事業収入		30,000	△ 30,000
	関連学術事業収入		100,000	△ 100,000
	野外活動事業収入	5,460,000	3,800,000	1,660,000
	登山学校事業収入	9,230,000	10,000,000	△ 770,000
	高所登山事業収入	170,000	1,040,000	△ 870,000
	指導啓もう事業収入	1,570,000	1,700,000	△ 130,000
	機関誌発行事業収入	1,374,000	1,400,000	△ 26,000
	出版事業収入	5,300,000	5,050,000	250,000
	国際交流事業収入	1,660,000	780,000	880,000
	その他事業収入	150,000	50,000	100,000
雑収入		( 1,130,000)	( 144,000)	( 986,000)
	受取利息収入	50,000	50,000	0
	負担金収入	1,000,000	0	1,000,000
	賃貸料収入	30,000	24,000	6,000
	その他雑収入	50,000	70,000	△ 20,000

(単位:円)

勘定科目		予算額	前年度予算額	増・減(△)
大科目	中科目			
繰入金収入		( 0)	( 540,000)	(△ 540,000)
	別途会計繰入金	0	540,000	△ 540,000
前期繰越		( 12,140)	( 13,347)	(△ 1,207)
	前期繰越	12,140	13,347	1,207
計		32,626,140	31,217,347	1,408,793

支出の部

(単位:円)

勘定科目		予算額	前年度予算額	増・減(△)
大科目	中科目			
管理費		(11,823,000)	( 8,136,000)	( 3,687,000)
	給料・手当	7,978,000	4,400,000	3,578,000
	旅費・交通費	400,000	250,000	150,000
	通信運搬費	400,000	330,000	70,000
	電話費	500,000	480,000	20,000
	文具費	90,000	90,000	0
	消耗品費	50,000	40,000	10,000
	宮積費	30,000	20,000	10,000
	什器備品費	100,000	250,000	△ 150,000
	印刷製本費	400,000	550,000	△ 150,000
	図書費	30,000	40,000	△ 10,000
	賃貸料	1,170,000	1,200,000	△ 30,000
	光熱水費	120,000	120,000	0
	会議費	30,000	70,000	△ 40,000
	諸税会費	30,000	30,000	0
	交際費	200,000	30,000	170,000
	広報費	150,000	90,000	60,000
	福利厚生費	20,000	30,000	△ 10,000
	法人諸費	50,000	50,000	0
	手数料	15,000	12,000	3,000
	諸謝金	10,000	10,000	0
	雑費	50,000	44,000	6,000
事業費		(19,780,000)	(19,910,000)	(△ 130,000)
	情報管理事業費		40,000	△ 40,000
	調査研究事業費		100,000	△ 100,000
	関連学術事業費		300,000	△ 300,000
	野外活動事業費	4,500,000	3,200,000	1,300,000
	登山学校事業費	7,110,000	7,800,000	△ 690,000
	高所登山事業費	20,000	930,000	△ 910,000
	指導啓もう事業費	1,470,000	1,220,000	250,000
	機関誌発行事業費	2,160,000	1,900,000	260,000
	出版事業費	2,900,000	3,500,000	△ 600,000
	国際交流事業費	1,600,000	900,000	700,000
	その他事業費	20,000	20,000	0
繰入金		( 718,000)	( 2,670,000)	(△ 1,952,000)
	基本財産会計繰入金	300,000	1,370,000	△ 1,070,000
	退職引当金繰入金支出金	418,000	300,000	118,000
	研究所会計繰入金支出金		1,000,000	△ 1,000,000
予備費		( 300,000)	( 500,000)	(△ 200,000)
	予備費	300,000	500,000	△ 200,000
次期繰越		( 5,140)	( 1,347)	( 3,793)
	次期繰越	5,140	1,347	3,793
計		32,626,140	31,217,347	1,408,793

## II 基本財産会計

### 収入の部

(単位：円)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
基本財産運用利息	250,000	410,000	△ 160,000
指定寄附金収入	0	2,000,000	△ 2,000,000
法人化拠出金収入	180,000	240,000	△ 60,000
終身会員収入	1,500,000	500,000	1,000,000
一般会計繰入金収入	300,000	1,370,000	△ 1,070,000
雑収入	0	1,000	△ 1,000
前期繰越金	7,420,750	7,058,750	362,000
計	9,650,750	11,579,750	△ 1,929,000

### 支出の部

(単位：円)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
一般会計繰入支出	250,000	410,000	△ 160,000
雑費	0	10,000	△ 10,000
次期繰越金	9,400,750	11,159,750	△ 1,759,000
計	9,650,750	11,579,750	△ 1,929,000

## III ヒマラヤ研究所会計

### 収入の部

(単位：円)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
会費収入	900,000	100,000	800,000
調査研究事業収入	1,500,000	0	1,500,000
情報管理事業収入	100,000	0	100,000
寄附金収入	900,000	1,500,000	△ 600,000
助成金収入	2,000,000	4,000,000	△ 2,000,000
雑収入	0	50,000	△ 50,000
一般会計繰入金収入	0	1,000,000	△ 1,000,000
計	5,400,000	6,650,000	△ 1,250,000

### 支出の部

(単位：円)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
管理費	2,500,000	2,500,000	0
調査費	500,000	380,000	120,000
印刷製本費	20,000	0	20,000
機材費	1,500,000	800,000	700,000
文献費	0	2,200,000	△ 2,200,000
資料費	500,000	0	500,000
出版費	0	500,000	△ 500,000
交流費	0	150,000	△ 150,000
雑費	180,000	0	180,000
予備費	200,000	120,000	80,000
計	5,400,000	6,650,000	△ 1,250,000

## IV 別途会計

### 収入の部

(単位：円)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
印税収入	1,500,000		1,500,000
ナング・カートカンパ収入	300,000		300,000
賛助金	500,000		500,000
雑収入	200,000		200,000
別途積立金運用利息	30,000	10,000	20,000
特別会計繰入収入		1,020,000	△ 1,020,000
一般会計繰入収入	418,000	300,000	118,000
前期繰越	208,875	208,875	0
計	3,156,875	1,538,875	1,618,000

### 支出の部

(単位：円)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
借入金返済	2,700,000	0	2,700,000
一般会計繰入支出	0	540,000	△ 540,000
次期繰越	456,875	998,875	△ 542,000
計	3,156,875	1,538,875	1,618,000

## 速報

### ブリクティ(6,720m)初登頂に成功!

6月4日、カトマンズからの情報によると当協会派遣のブリクティ登山隊は、5月18日、19日、21日の3日間にわたってブリクティ峰(6,720m)の初登頂に成功した。

登頂したのは18日に佐久間、土谷両隊員とネパール人1名、19日は遠藤、三笠両隊員、21日は菊地隊長、浅見、寺田、新妻隊員とネパール人1名。

# カシミールの名峰

## クン(KUN 7,077m)へ

### 1982年HAJヒマラヤ登山学校

7.25～8.28(35日間)

昨秋、ガールワールのナンダ・カート(6,611m)に派遣した第5回HAJヒマラヤ登山学校隊が、9月下旬のヒマラヤ全域にもたらされた驚異的な豪雪によって7名の隊員が消息を絶つという遭難事故に見舞われたことは衆知の通りである。

1978年のヌン(7,135m)に始まったヒマラヤ登山学校は、昨年で5回目を迎え、それぞれに登山学校本来の成果を着実にあげてきただけに、協会の受けたショックは大きくいろんな波紋をなげかけた。

7名ものカメラードを失なう大きな事故のため、当然の事ながら登山学校事業の在り方についてもいろいろな意見が出された。

其の後登山学校委員会を中心として種々検討が重ねられた結果、やはり、HAJのヒマラヤ登山学校が果してきたこれ迄の役割には大きいものがあるという判断から、今回の尊い教訓を生かし、より一層の周到なる準備をもって継続していくことに決定した。

こうして実施か否か保留になっていた第6回ヒマラヤ登山学校隊は、正式に実施が決定し、17名の隊員(協会派遣インストラクター4名を含む)が、カシミールの名峰クン(Kun 7,077m)に向かうことになった。

事故の教訓を生かして今回は、日本を出てから帰るまで35日間とこれ迄よりも1週間長く登山活動日数を取り、日程に余裕を持たせての基本計画とし、また、チーム作りも新年を迎えると同時に始動した。すでに1月以来4回の合宿と6回の集

会を重ね、実務準備を進めてきており、さらに6月中旬には低圧室での急性高所暴露試験(6,000mまで)も予定されている。

これらの成果がどう結実するか注目したい。

#### 登山学校の趣旨

日本ヒマラヤ協会は、1967年創立以来ヒマラヤ諸国との友好・親善相互理解をモットーに、登山・学術・その他幅広い分野にわたって各種の文化活動を展開しております。1977年以来毎年実施しております「ヒマラヤ登山学校」もその一環であります。

御承知のように、ヒマラヤは地球上で最も高い山岳地域であり、そこでの登山活動は高所という低酸素化で行われるため、困難かつ複雑な要素を含んでおります。また、登山許可の取得や、通関をはじめとする種々の手続き、渉外など登山以前に処理しなければならない多くの仕事があります。ヒマラヤを目ざす多くの岳人たちが、チーム作りの段階や登山以前の問題で種々の壁にぶつかり計画を断念しているのが実情であります。

しかし、ヒマラヤの素晴らしさにふれ、その国と人とを理解し、高所の登山を実践することによって培かれる「困難」を克服する力は意義あることであり、1人でも多くの岳人にヒマラヤ登山を体験させようというのがHAJの登山学校の目ざすところでもあります。

この「ヒマラヤ登山学校」は、確かな技術と経験を有する指導者(インストラクター)の統括のもとに、安全かつ確実に第一義として隊員自身が

必要とされる諸準備をすすめ、国内でのトレーニング・研究を行い、ヒマラヤの高所を経験し、ヒマラヤ登山の基礎と実験を経験しようとするヒマラヤ登山のガイドンス・システムであります。このため隊員も今後とも真剣にヒマラヤ登山を考え、さらに大きなヒマラヤ計画を進めて行けることを目的としております。

諸外国には、国家の援助のもとに活動しているこの種の学校がありますが、我が国では極めてユニークなものであります。

過去5年間に実施した「ヒマラヤ登山学校」は、1977年秋、ガルワール、タルコット峰(6,099m)で日本山岳会に協賛して行って以来、第1回1978年夏カシミール、ヌン峰(7,135m)第2回1978年秋ガルワール、トリスル峰(7,120m)、第3回1979年秋バラシグリ、キャシードラル峰(6,400m)、第4回ガンゴトリ、ケダルナート・ドーム(6,831m)と成果を上げて参りましたが、昨年、第5回目としてガルワール、ナンダカート峰(6,611m)での実際に際しては、予測をはるかに越えた短時間の豪雪のため7名の隊員を失う結果となったことは大自然の力とはいえ、大きな反省材料であります。このことを念頭に置き更にあらゆる角度から再点検を行い1982年隊の実施となりました。

#### 登山隊の名称・構成

##### 1. 名称

1982年日本ヒマラヤ協会カシミール・ヒマラヤ登山隊

HAJ KASHMIR HIMALAYA

EXPEDITION 1982 (略称HKE'82)

##### 2. 構成

隊長1名 副隊長1名 インストラクター2名  
隊員13名 リエゾン・オフィサー1名

#### 実行・推進の組織

日本ヒマラヤ協会登山学校委員会(実行委員会)

会長 柴田金之助 副会長 山倉洋一

実行委員長 稲田定重 副実行委員長 山森欣一  
事務局 尾形好雄 実行委員 土居正勝

事務局

〒160 東京都新宿区高田馬場3丁目23番1号

#### 現地連絡先

C/O Shikhar Travels Private Ltd  
1701 Nirmal Tower 26, Barakhamba Road, New Delhi : 110001  
INDAI  
☎ : (New Delhi) 42555 42666  
Telex : 031-4364 (SHIK IN)  
Gram : SHIKKEE

#### 登山計画の概要

##### 1. 目標の地域・山

インド・カシミールヒマラヤ、ヌン・クン山群  
クン(KUN) 7,077 m

##### 2. 目的

- (1) 7,000 m峰の短期間による登頂
- (2) ヒマラヤ登山実践の基本の習得

##### 3. 時期

1982年7月～8月

##### 4. 目標の山の概念

クンの位置と山姿

クン(Kun 7,077 m)はパンジャブ・ヒマラヤ、カシミールの北西部に位置し周辺には7,000 mを越えるピークはヌン(7,135 m)とクン(7,077 m)だけである。

一般にはヌン・クンと続けてよばれているがまったく別の山である。クンの周辺には南西、約6 kmにカシミールの盟主ヌン(Nun 7,135 m)がそびえ、北東にピナクル・ピーク(6,930 m)、南にホワイト・ニードル(6,600 m)等の山群がある。クンは別名「メル=岩山」とも呼ばれ純白につつまれたヌンとは対象的に男性的な山姿を見せている。

#### 登山史

この山群への偵察は1898年、イギリス人とグルカ兵が山岳探検と訓練を目的として入ったのが最初で、以後1902年にはアーサー・ネーブ博士とバートン師は初登頂のルートになったシャフト氷河に入っている。

又、1904年にはヒマラヤ探検家として名高いワークマン夫妻は第三の高峰ピナクルピーク(6,930 m)に登頂している。

クンの初登頂は1913年8月にカルチアーティを隊長とするイタリアによってなされた。

彼らはシャフト氷河をつめヌンとクン間にあるスノー・プラトーンにC・5を設け、8月3日クンとピナクル・ピークの稜線へ出て登頂している。

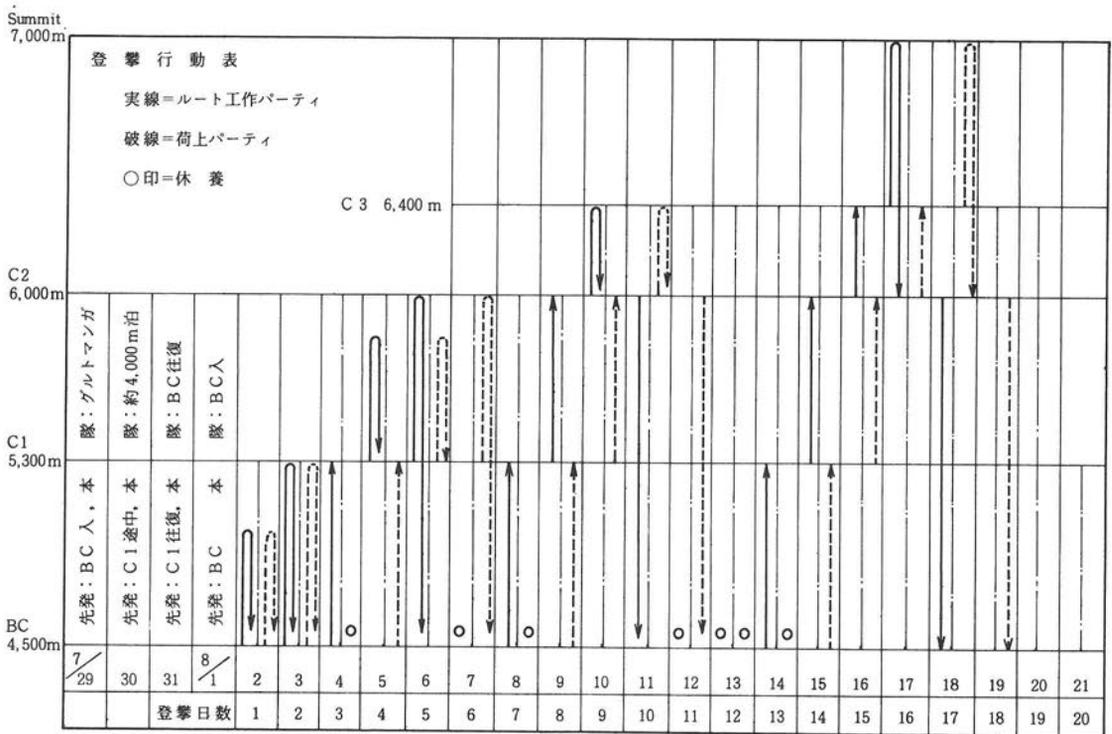
アプローチ

日 程

北面からのアプローチはたいへん交通の便がよく、国内線でスリナガールまで飛び、バスをチャーターすればキャラバンなしでシャフト氷河の対岸グルマトンガに着く。スル河を渡渉し2日位でシャフト氷河上約4,500mに物資を集結してベースキャンプを設営する。

日数	月 日	日	程
8	7/18		先発隊(2名)成田出発→デリー着
7	19		登山手続 関係機関挨拶
6	20	} 先発隊々務処理	隊荷通関
5	21		無線機使用許可
4	22		調達物質購入
3	23		再梱包
2	24	本隊東京集合	先発隊アプローチ・マーチ開始, デリ～ジャム
1	25	本隊 成田出発→デリー着	ジャム～スリナガール
2	26	本隊アプローチ・マーチ開始, デリ～ジャム	スリナガール～カルギル
3	27	ジャム～スリナガール	カルギル～グルマトンガ
4	28	スリナガール～カルギル	グルマトンガ～4,000地点
5	29	カルギル～グルマトンガ	B・C建設
6	30	グルマトンガ～4,000m地点	隊荷整理
7	31	B・Cピストン	C・I偵察
8	8/1	本隊B・C入り ← 合流	
9	2		} 登山活動期間
10	3	C・1建設	
11	4		
12	5		
13	6		
14	7	C・2建設	
15	8		
16	9		
17	10		
18	11	C・3建設	
19	12	アタック態勢完了	
20	13	B・Cにて休養(2日間)	
21	14		
22	15		
23	16		
24	17	第1次アタック	
25	18	第2次アタック	
26	19	B・C集結	
27	20	(予備日)	
28	21	B・C撤収	
29	22	タンゴール～カルギル	
30	23	カルギル～スリナガール	
31	24	スリナガール～ジャム	
32	25	ジャム～ニューデリー	
33	26	隊荷整理・帰国準備	
34	27	帰国 ニューデリー出発	
35	28	成田着・解散	





ル ー ト

シャフト氷河からヌンの東稜をこえて、パルチック氷河上部スノー・プラトーへ出てピナクル・ピークとクンの間のコルから北東稜より登頂する(前進キャンプ数-3) 予定である。

戦 術

1. キャンプ展開

- B・C シャフト氷河左岸サイドモレーンの4,500 m付近に設置する。
- C・1 スノープラトーへの登りの取り付け付近約5,300 mに設置する。
- C・2 スノープラトーへあがる少し手前約6,000 mに設置する。
- C・3 スノープラトーを横断し、クンとピナクルピーク間のコルへの取り付け付近約6,400 mに設置する。

2. ローテーション

- (1) 4,000 m以上の高度においては、1度以上往復した後でなければ絶対に宿泊しない。
- (2) 休養は必ずB・Cで行い、アタック前の休養は原則として2日間とする。
- (3) 原則としてアタックは2回までとする。

隊 員 名 簿

隊 長 山森欣一 (38)

KINICHI YAMAMORI (Mr)

副隊長 稲垣公平 (42)

KOHEI INAGAKI (Mr)

インストラクター 角田不二 (29)

FUJI TSUNODA (Mr)

インストラクター 今野一也 (43)

KAZUYA KONNO (Mr)

隊 員 長 繁夫 (31)

SHIGEO CHO (Mr)

隊 員 丸谷政明 (29)

MASAAKI MARUTANI

SEISHI KUDO(Mr)

隊 員 三好喜代美(25)

KIYOMI MIYOSHI

隊 員 川名正一(34)

MASAICHI KAWANA(Mr)

隊 員 勝山教孝(31)

MICHITAKA KATSUYAMA

隊 員 三浦敏弘(29)

TOSHIHIRO MIURA(Mr)

隊 員 小暮 孝(24)

TAKASHI KOGURE(Mr)

隊 員 太田行雄(38)

YUKIO OTA(Mr)

隊 員 平田清志(35)

KIYOSHI HIRATA(Mr)

隊 員 高坂裕紀(28)

YUKI TAKASAKA(Mr)

隊 員 小坂邦弘(27)

KUNIHICO KOSAKA(Mr)

隊 員 肥田繁男(24)

SHIGEO HIDA

隊 員 工藤誠志(32)



## バツラー山群 (その2)

内田 勲

### コズ・グループ

コズサル (6,677 m) はバツラー山群のなかで最も西端に位置しているが、バツラー山群を細分すれば、この山を中心としてコズヤズ氷河から区切られた西側の (6477) 峰、(6201) 峰とともに、コズグループと呼ばれている。

豪快な南面の岩壁を持つコズサルの頂上を踏むとすれば、マトランダス村のやや上流に、カランバル川左岸に流れ込んでいる谷を東に詰めて南面に取りつか、ペアヒン村上流の狭い氷河をこれも東に詰めて北面から稜線に出て登るルートが考えられる。

(6477) および (6201) 峰は、いずれもチリンジ村から、チリンジ氷河を詰めて北西面から詰めて行く以外に今のところ登頂可能なルートはなさそうである。勿論すべて未登のはずだ。

### カランバル氷河を行く

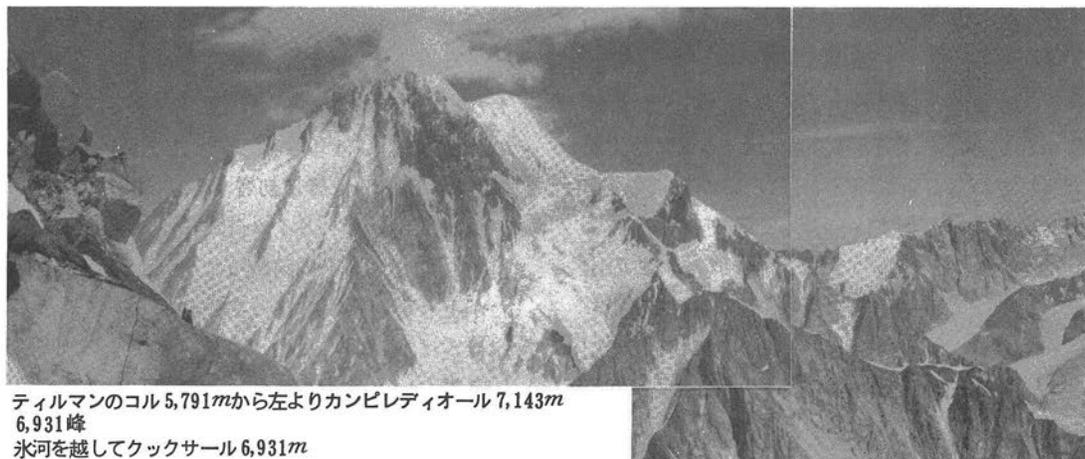
カランバル氷河は、カランバル川の流れを止めるかのようにその対岸近くまで押し出している。この氷河を遡ると地元民が夏の期間だけ利用

する夏村がある。氷河を見降す緩やかな傾斜地に畑や牧草が点在し、氷河の上流には、カンピレディオール (7,143 m) と (6,872 m 峰) の鋭峰が眺められ、のんびりと幕営するにはもってこいの場所だ。夏村としての規模は大きい方と思われるが、10月初旬になったら殆んどの人が下ってしまうという。ここまではヤクが元気に荷を背負って登って来てくれる。

このカランバル氷河から登頂可能な山をあげてみると、夏村から下って上流に向かうとすぐに、右岸にはほぼ真北の方向から本流に流れ込んでいる狭い谷がある。この谷を詰めていくとコズグループの (6628) 峰に届いている。真下からストレートにルートをとるのは難しそうだ。南稜に取り付いてから頂上を目指した方が得策だと思う。

同じコズグループの (6477)、(6201) のふたつの峰までこの谷が続いているかどうかは、今のところ解らない。ただコズグループ各峰の初登を目指すならカランバル川左岸側から研究した方が無難であることは間違いなさそうだ。

カランバル氷河の左岸上奥に連なっているの



ティルマンのコル 5,791m から左よりカンピレディオール 7,143m  
6,931m 峰  
氷河を越してクックサル 6,931m

が、ヤシクック氷河源頭上にあるやまなみである。(6568), (6680), (6114)の各峰とも、ヤシクックグループと呼ぶが、カランバール氷河に立って観察してもこの3峰の固定は容易ではなかった。しかし観た限りではいずれの峰もカランバール氷河からの登攀は充分可能と思えた。ヤシクック氷河側からの入山が望めそうそうにない現状では、ヤシクックグループの初登はカランバール氷河を遡る以外にはない。

カランバール氷河右岸に(6258)峰が、独立峰を思わせるように座している。この山は夏村から氷河を挟んで正面に眺められる。カランバール氷河からの(6,000 m)級の山としては最も容易に取付まで行ける山である。北面の幾つかの稜から取付くのもいいが、左岸を遡って本流に南から支氷河が合流する付近に派生している北東稜に取付くのが良策と思う。ここは74年にカンピレディオール の偵察に来た、京都カラコルムクラブの2名、そして同じく77年カンピレディオールの南稜から登頂を目指して失敗した、ドイツ・オーストリアの合同隊がベースキャンプを置いた所だ。

源頭に鎮座しているカンピレディオールは、75年6月に広島山の会が右岸沿いに進んで南西稜から登頂を済ませている。

カランバール氷河を源頭近くまで達するためには、7~8月では時期が遅過ぎるようだ。

カンピレディオールの南に目立ち過ぎている鋭峰、6872峰は初登だけを目指すならカランバール氷河からは止めた方がいいと思う。

### バツラ氷河側からの 登頂を考える

バツラ氷河には今のところ足を踏み入れるのは難かしそうだ。1925年9月にオランダ人が源頭まで達していることを考えれば、少々時期が遅くても氷河の遡行した支障はなさそうである。

源頭にクックサール(6935)峰がある。この山は大小4つの峰があるが、最も高いのはいちばん奥にある。カンピレディオールとのコルへ近づくにつれて技術的には難かしさを増すようだ。手前の南面から取付けばアップダウンの縦走をよぎなくされるので、どちらを取るか考えさせられると



▲ ティルマンのコル5,791mよりバツラ氷河右岸の山々

ころだ。北面のルプール氷河側からの登頂も考えられるが、南面よりも雪は多いだろうという程度しか解らないので書きようがない。ましてヤシクック氷河側からの状況などは雲をつかむようである。

次に(6931)峰がある。この山はカンピレディオールの北東方向に位置しているが、頂上付近は南から見るかぎり雪をたっぷりいただいた白いピークだ。下部の細い部分は見えないが、バツラ氷河からの登頂は充分可能だと思う。

カンピレディオールだが、南面を見るかぎり手がつけれないという山容ではなかった。(6885), (6872), (6830)の各峰は、初登を目指すなら南側のククアイ氷河、トルタル氷河に限ることは前回で述べたので省く。

長大な60kmに近いバツラ氷河の源頭まで達するには、ポーター事情を考えると入山時期を研究する必要があるようだ。

バツラ氷河を源頭から下流方向に目を移すと、バツラ氷河Ⅱ峰、Ⅰ峰、バスピークと7,000 m級の雄大なやまなみが右岸沿いに続いている。右岸からの登頂は、1954年8月、ドイツ・オーストリア合同隊が(6845)峰に初登している。また1959年6月、イギリス・ドイツ合同隊がバツラⅠ峰を目指したが、頂上に向かった2人が帰らず登頂したかどうか不明になっている。左岸に比べて右岸は雪は多いが、登頂ルートを見つけれないという厳しい姿はしていない。この氷河に立ち入ることが自由になれば登山隊が押し寄せてきそうだ。

## ウルタル I 峰, II 峰

この山は I 峰が 7,388 m, II 峰が 7,329 m と 7,000 m を越しているくせに、交通至便の位置にありながら何故か許可が下りず未登で残っている。登頂するにはグルキン氷河を利用するのが最も自然だろうが、この氷河は上部付近が非常に荒れていてどちらかの稜に取付くことになるだろう。雪稜づたいに登るなら左岸寄りに取りついた方がいいと思う。岩壁を選ぶなら右岸に取付けばいいと思う。ルート捜しに苦労しそうな感じだ。

ウルタルといえばその南壁の素晴らしさで持っているようなものだが、カリマバートから見上げる豪快さは、眺めているだけでも飽きない。この 2 峰を南面から登るとすれば、ウルタル谷, II 峰だけだとグルピー谷しかない。いずれもかなりの度胸を用する。I 峰はハサナバード氷河からの西面からも行けるが状況が解らない。

## ムチチュール氷河から

この氷河の右岸上に 6200 峰, 6,500 m 峰, ハッチングールキッシュ (7,163 m) が連らなっている。いずれも未登だ。バルタル氷河側からの登頂も可能だ。6200 峰は美しい三角錘の形をしている。6,500 m 峰もバルタル側から見てもとがった鋭い形だ。ハッチングールキッシュはバルタル側から何度か試登されたが敗退している。今年も

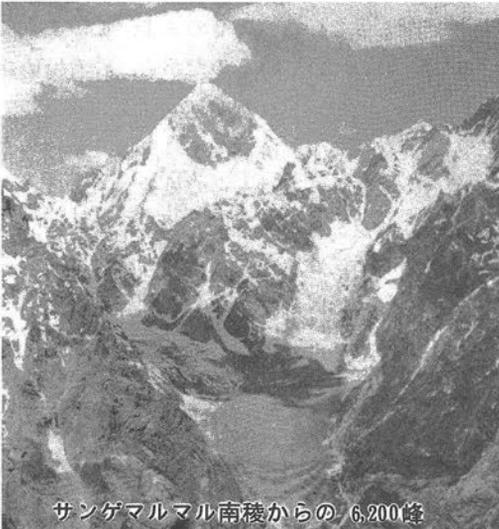
金沢大学隊が入山しているはずである。

ハッチングールキッシュに関しては、ムチチュール氷河, バルタル氷河側のいずれから取付くにしてもルートの選定に難儀するのは同じぐらいではなかろうか。

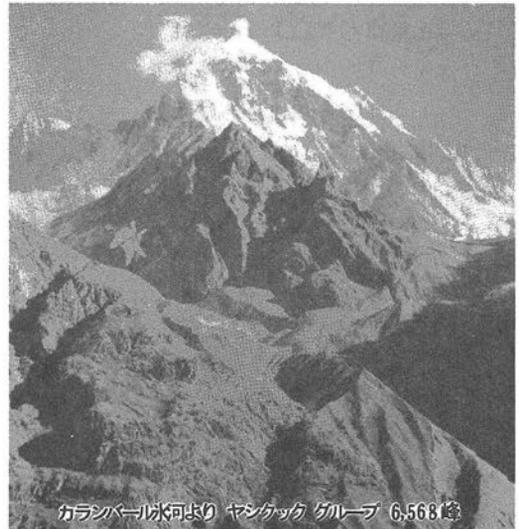
6850 峰, 6200 峰のふたつの山は立派にひとつのピークとして存在しているが、ムチチュール氷河, バルタル氷河側のいずれからもハッチングールキッシュほど登頂ルート捜しに悩むことはなかろうと思う。

ムチチュール氷河とハサナバード氷河の間に、長い南稜を持つどっしりとした山容のサンゲマルマル (6,949 m) がある。これまでに何隊が試登しているか、最近では 1981 年 7 月に長崎北稜会が 6,210 m まで試登している。ムチチュール氷河から南稜の途中に出て登るのが無難だと思う。

以上バツラムスターグに関しては、6,000 m 級ラインの山を主として述べてみたが、正式初登記録に関係なく、過去にこっそりと少人数で登られている山もあるかも知れない。しかしそれらは確めようもないが、最奥の村まで山を見に来たふりをして入山し、素早く登って帰ってくるということが力のある登山者には可能な山が幾つもあることも確かである。不謹慎な発想かも知れないが。



サンゲマルマル南稜からの 6,200 峰



カラシバル氷河より ヤククック グループ 6,568 峰



## ナムチャ・バルワ

水野 勉

5月21日の朝日新聞朝刊によると、中国科学院が今年ナムチャ・バルワ（7756メートル）の調査をおこなうことになり、すでに登山ルート調査に赴いた中国国家体育運動委員会調査隊がルート調査を終え、北京に戻ったとのことである。この記事を読んで、しばらくは感無量であった。とうとうナムチャ・バルワもその未知のヴェールをはがされる時がやって来たか——という思いである。ある別の方面からのうわさによれば、ナムチャ・バルワの登山許可が来年には下りるということである。どこの国の、どこの隊に許可が下りるかが楽しみだが、100隊ぐらいは申請を出しているというからどうであろうか。

キングドン・ウォードのツァンボ・ゴルジュおよびナムチャ・バルワ付近の探検については、この「閑話(51)」でとりあげたばかりであるので、なお更感慨が深い。ナムチャ・バルワについてふたたびここに詳しく述べるつもりはないが、いささか前々号と重複しないようにふれておきたい。

深田久弥氏の「ヒマラヤの高峰」でも、ナムチャ・バルワについて一項目をあげて書いているが、「編者追記」にあるように、深田氏はベィリーとモーズヘッドのツァンボ・ゴルジュ探検まで述べているだけで、級数のつごうでキングドン・ウォードの探検についてはふれていない。その代り、ベィリーの「ヒマラヤの謎の河」という訳書には、キングドン・ウォードのGTに載った記事の訳文が諏訪多栄蔵氏によって「南東チベットの探検」として発表されている。その概要については、ぼくが前述したように、この「閑話」で書いている。

深田氏はナムチャ・バルワの写真は「ヒマラヤン・ジャーナル・第12巻」の巻頭に載っているだ

けだと書いているが、この写真をとったG・テラーについては一言もふれていない。この写真は1893年7月24日、トリペから撮ったナムチャ・バルワの北面の写真である。これに関連した記事は巻頭のF・ラドローの「タクポとコンポー南東チベット」である。1ページから16ページにかけて載っており、写真が豊富で、しかも東部ヒマラヤの地図が付いている。ラドローは主として植物採集の旅であったので、山よりは花の写真が多い。この記事は「ヒマラヤン・ジャーナル」が第15巻まで覆刻されているので容易に読むことができるが、書痴の立場からいうと、4ページ対の写真はカラーであり、覆刻版ではそれがモノクロであるから、やはり原本が良いということになる。

ラドローとテラーは同行したのであるが、このほかにシェリフが同行している。この3人についてはいずれ「花を求めて」で紹介するつもりだったが、「花を求めて」が「キングドン・ウォード」で止まってしまう、そのまま、このようなことを書きつらぬいているのだから、読者はいららされているかもしれない。「閑話」と思って、この気まぐれにつき合ってくれば、たいへんありがたい。このラドローらの旅については、少しは前にふれたことがあると記憶しているが、日本山岳会の「山岳」第76年には、この東部ヒマラヤにおける旅行の本「a Quest of Flowers」(1975)が春田俊郎氏によって紹介されているから、興味のある方は読まれるとよい。ナムチャ・バルワを語るにはこのラドローらの探検までふれないと片手落ちになる。その点では、深田氏の文章が1966年7月に書かれ、また紙数のつごうで、ベィリーらの探検のみで終わっているのは惜しい。

けれども、ベイリーとモーズヘッド、キングドン・ウォード、あるいはラドロー、シェリフ、テラーなどは、いずれも登山家ではなかった。はじめからナムチャ・バルワを登るつもりは全くなかった。登ろうという意思は全くみられない。ナムチャ・バルワを登ろうとした登山家がいたのだろうか。それはたしかにいた。H・W・ティルマンである。

ティルマンは1938年エヴェレスト遠征後、シェルパ2人を連れて、シッキムとチベットの国境にあるゼム・ギャップを登るプライベートな小旅行を試みた。そして、かれは英国へ帰らねばならなくなったが、今度はアッサムからナムチャ・バルワを試登したかった。エヴェレスト遠征隊長として名声を得ていたので、アッサムの首都シーロンでは厚遇を得たが、たまたま、エヴェレスト遠征が1940、1941、1942年と毎年つづけておこなうようにも申請を出していたので、ナムチャ・バルワへの遠征許可がむずかしかった。1938年11月にはいったん英国へ戻った。インド政府としてもエヴェレスト遠征をチベット政府に許可申請を出しているのに、更にナムチャ・バルワ遠征の申請を出すのはまずいとして、ナムチャ・バルワの方はラサへは何もいわないことにした。しかし、アッサムの当局者はティルマンのことを考えてくれて、その代りゴリ・チュン(21,450フィート)登山許可を出してくれた。ティルマンは更にゴリ・チュンの北東にあるカンドウ(23,260フィート)を登れる許可もとった。このカンドウについては深田氏も書いていると思う。ティルマンはゴリ・チュンすらも登れず、病気に倒れて失敗したが、一つには1939年という年にはすでに第2次大戦がはじまっていたので、英国の陸軍将校として、ティルマンはいつでも戦いに加わる義務を負っていたし、ティルマン自身も、山を登っていて祖国の戦争に加われないことを恥としていた。もし、第1回が失敗しても、第2次大戦がもう少し遅れていたなら、ティルマンはカンドウの試登をやったであろう。

さて、ゴリ・チュンとカンドウの登山には失敗して、ティルマンは第2次大戦に軍人として参加し、1945年までドイツ軍と戦った。最後はアル

バニアとイタリアでパルチザンとともにゲリラ戦をおこなった。戦後、すぐかれはまたナムチャ・バルワを思い出した。ゴリ・チュンやカンドウではなく、ナムチャ・バルワそれ自体をめざした。終戦の年、1945年10月に、かれはF・Mベイリーに手紙を書いた。

Dear Col. Bailey.

Having now been demobilised I am beginning to think of the Jubilee. I should very much like to go with Himalaya for another expedition, or possibly more, before I get past it.

I had a very unsuccessful trip to the Assam Himalaya in 1939, and I hope to go there again some time to have a go at Gori chen. But of course, the great magnet of those parts is Namche Barwa, and am writing to ask what you think the possibilities and an approach from the South, say KAPU, where you passed. would it be necessary to get permission from Lhasa to enter that part of Tibet?

If you are likely to be in London any time, I should very much like to have a talk with you about that part of the world.

yours sincerely,

H. W. Tilman

長々と手紙を引用したが、この手紙はここにはじめて発表されるもので、全文を掲げてしまった。ぼくのささやかなコレクションの自慢の一つである。この手紙にあるように、ティルマンとベイリーがロンドンで会って、ナムチャ・バルワについて語り合ったかどうかはわからない。「ティルマン伝」の著者もこのことについて一言もふれていないのでどうにもならない。ナムチャ・バルワをめざしたのはティルマンただ一人であったことは事実であろう。かくして、今や100隊を超える申請が出ているとは、これこそ今昔の感というものであろう。

## ■ 寸 感 ■

今春のネパール・ヒマラヤの日本隊は珍しく巨峰への挑戦が無かったせいか成功率が高かったようです。当協会のブリクティ隊も今春登山隊の殿として登山活動中ですが、すでに現地では結果が出ていることでしょう。一日も早く吉報を耳にしたいものです。地図の空白部だけに山を見つけるのに苦労しているとか、ドライ・エリアにもかかわらず大雪に見舞われたとか、知られざる山へ挑む苦労話が伝えられます。

大雪といえばガールワール・ヒマラヤのガンゴトリ山域でも5月に入って1週間も大雪に見舞われたそうです。これもインドの異常冷夏と関連があるのでしょうか、呉々もご用心！ (O)

## 事 務 局 日 誌 (5月)

1日(土)～3日(日) '82年クン登山学校合宿  
(於：富士山)

13日(木) '82年クン登山学校集会

20日(木) 冬期マナスル登山隊(アプリケーション

ョン、外務省へ送付依頼)

24日(月) 東京ヒマラヤ集会

'82年クン登山学校集会

27日(木) 急性高所暴露試験の打合わせ(於：  
立川航空医学実験隊、尾形)

29日(土) 事務局打合わせ(稲田、山森)

30日(日) 昭和57年度通常会員総会

ヒマラヤ登山実践研究会旗上げ式

カラコルム・セミナートレッキング

説明会(於：東京勤労福祉会館)

## ヒマラヤ No.128 (7月号)

昭和57年6月10日印刷 57年7月1日発行

発行人 柴田 金之助

編集人 尾形 好雄

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1  
淀橋食糧ビル506号



全世界のネットワーク

# AFIA ホーム 保険会社 海外 山岳 保険

※凍傷・ヘリコプターチャーター料等も支払います。

※例 4ヶ月間の場合＝死亡100万円、救援者費用100万円で25,520円です。

※詳細は下記へお問い合わせ下さい。

### 取扱代理店

郷インシュランス・コンサルタント

[ホーム保険会社代理店]

〒100 千代田区丸ノ内3-1-1

国際ビル8F

TEL. 03-281-2981

### 相談所

ホーム保険会社首都圏支店

〒100 千代田区丸ノ内3-1-1

国際ビル8F

TEL. 03-211-4401

担当：寄木康男(ヨリキヤソ)

ネパールへの旅は経験豊かな  
代理店を選ぶことが第一です



■ヒマラヤ観光開発株はネパール政府観光局  
指定インフォメーションセンター、ネパール  
航空日本地区販売代理店に指定されてあり  
ます。

■ネパールへの個人旅行/トレッキング/パ  
ッケージ・ツアー/トレッキングで登れる  
18峰/登山の計画等、あらゆるご相談に経  
験豊富なスタッフがおりますので、安心し  
ておまかせください。

■ネパール国内ではトランス・ヒマラヤン・  
ツアー社/ホテル・エベレスト・ビュー/  
日本航空総代理店の業務を行なっておりま  
す。

## ヒマラヤ観光開発株式会社

〒105 東京都港区新橋3丁目26番3号 会計ビル 5F  
電話 03 (574) 9292~4

# Shikhar Travels

—— シカール・トラベル ——

## “魅惑の インド・ヒマラヤ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン  
クル・マナリ・ラダック・ネパール.....  
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん!

当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、  
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。

**Shikhar**

TRAVELS PRIVATE LIMITED

1,701, Nirmal towers,

26 barakhamba road new delhi-110001

tel. 42555, 42666 telex 031-4364 SHIK IN Cable SHIKHE

Branch office: Gangtok

Camp office: Joshimath & Uttarkashi



CAPT SWADESH KUMAR  
(MANAGING DIRECTOR)



# ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



## ICI 石井スポーツ

至中野	至池袋	ICI山用品本店	至池袋
		ICIテニス用品	
大久保駅	新大久保駅	ICIスキー用品 本屋	明治通り 至若松町
		大久保通り	
至新宿		ICIサッカー・野球用品	至新宿

- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(208)6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(346)0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-14 ☎03(264)5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-6 ☎03(264)8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2-123 ☎0486(41)5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273(27)2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保2-19-10東和ビル内 ☎03(200)7219